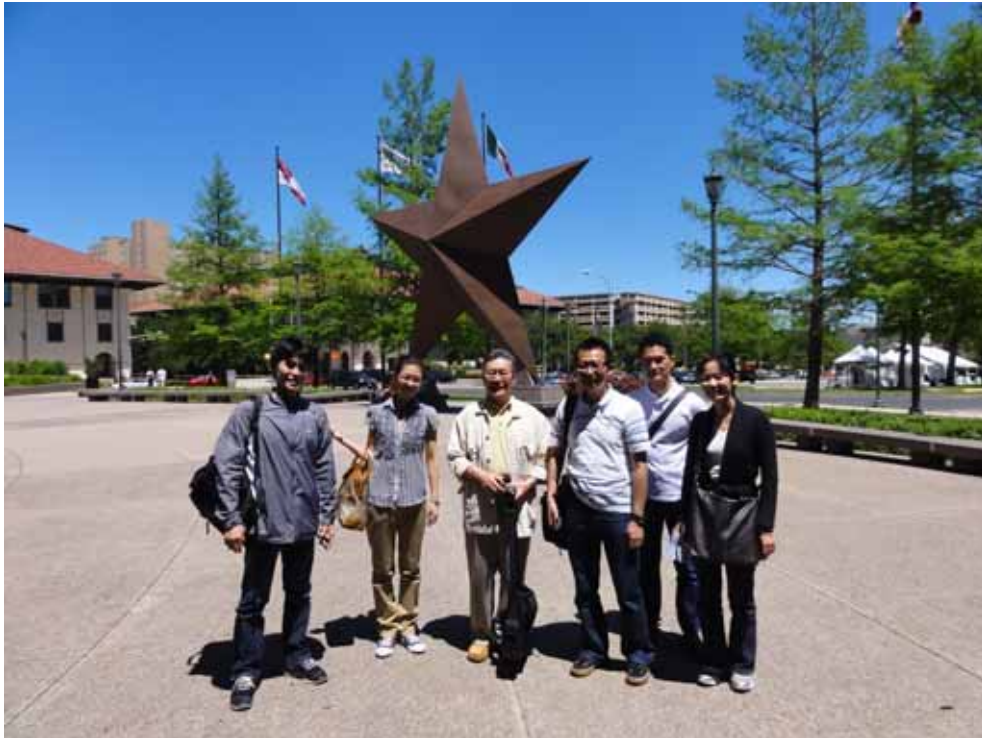


GROUP STUDY EXCHANGE REPORT



**Visit by a team
From District 2660,
Osaka, Japan
To District 5870, Texas, USA
April 23 - May 21**

目次

1. 地図、訪問ロータリークラブ

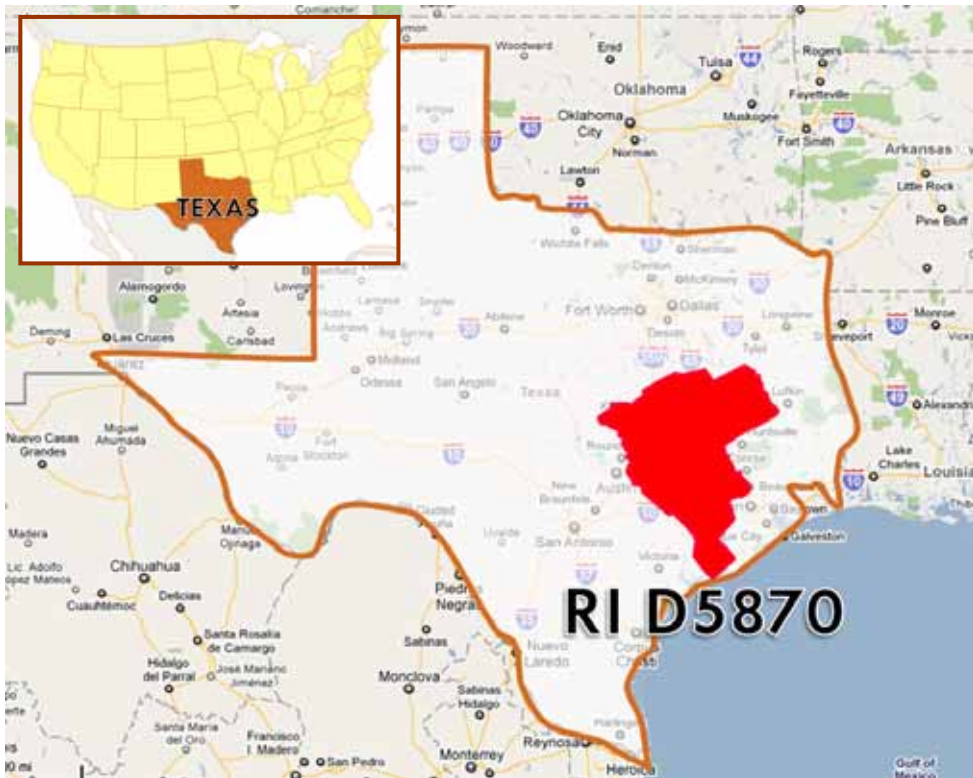
2. 日程、訪問地

3. 職業研修、ホームステイ報告

- 佐藤俊一
- 松永 圭司
- 吉田 章夫
- 品川 明日香
- 端山 信吾
- 大本 尚美

1. 地図、メンバー紹介

訪問地域



訪問ロータリークラブ

- April 26th,(Lunch Meeting) - Joint Austin Clubs
- April 27th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Austin ,Texas
- April 29th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Round Rock, Pflugerville, Taylor, Hutto
- April 30th,(Lunch Meeting) - presentation at Tejas Multi-District Conference
- May 3rd,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Navarro County/Corsicana
- May 4th,(Lunch Meeting) - Fairfield R.C
- May 5th,(Dinner Meeting) - Rotary Club of Waco, Lake Brazos, Waco Sunrise
- May 6th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Mexia, Teague
- May 10th,(Lunch Meeting) - Space Center R.C
- May 11th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Hallettsville
- May 12th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Shiner
- May 13th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Yoakum
- May 11th,(Lunch Meeting) - Hallettsville R.C
- May 14th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Georgetown
- May 18th,(Lunch Meeting) - Rotary Club of Georgetown Sun City

2. 日程、訪問地

2010年4月24日（土）

Orientation meeting、Bob Bullock Texas State History Museum

昨夕Austinに到着して今日がGSEプログラム初日。晩には雷雨だったが朝から晴天に。

午前中は、近くのWal-Martで米国内用の携帯電話を各自購入。その後、地区のGSE ChairであるDon Ray George氏の事務所で日本から先に郵送していた荷物の荷ほどきを行う。(行方不明になっている荷物もあったが、)荷物を6人で分配すると1人段ボール箱1箱となる。昼食をとりながら本日からスケジュールの確認。ここで初めてSan Antonioでのホストファミリーが分かったり、多少のスケジュール変更もあったが、スケジュールはおおむねあらかじめ日本で聞いていたのと変更はなく、また受け入れ体制もしっかりしている様子。

午後からはテキサス州議会議事堂やテキサス大学の近くにあるBob Bullock Texas State History Museumを訪問。ここは3階建ての比較的新しい博物館であり、1階は先住民や入植者たちの遺物を展示。2階は南北戦争から現在までのテキサスの歴史を石油や宇宙産業などで紹介。3階は主にテキサス共和国の独立革命(独立戦争)を取り上げている。展示以外にもIMAXでNASAの宇宙計画や独立と開拓の歴史を映像でも観ることができる。展示内容から、この施設はテキサスの歴史の理解だけでなく、アイデンティティの形成を意図した施設であることがわかる。



2010年4月25日（日）

ホストファミリーと過ごす 午前

品川団員

ホストファミリーの16歳、13歳の2人の女の子に、折り紙を教える。学校の授業で鶴の折り方は習ったことがあるそうで、思った以上に上手だった。日本から持っていった折り紙の本を見ながら、ボートやピアノなど簡単なものにチャレンジした。

Sailing at Lake Travis 午後

12時前にそれぞれのホストファミリーと一緒に、Mary Hey氏の家を集まり昼食を食べた。Mary Hey氏の自宅はLake Travisが見渡せる場所にあり、多くのボートが湖でセーリングをしている様子が見えた。Lake Travisはダム湖で、このダムの発電がAustin市の電力を賄っているとのこと。(※テキサスには完全な自然湖は一つも無いらしい。)

昼食後、それぞれのホストファミリーと別れ、セーリングの為にヨットハーバーに向かう。全長約8メートルのヨ

ットに11人が乗るので、団員が甲板の片側に乗る形になり、タッキングと言われている 方向転換行動の度にセイルを避けながらボートの反対側に移動する必要があった。

セイリングは考えていたような優雅な体験ではなく、かなりアクティブな体験だった。



2010年4月26日（月）

Round Rock CVB

ラウンドロック市 観光コンベンション協会 事務局長 Nancy Yawnさん

初めてのグループ研修で、オースティン北にあるラウンドロック市観光コンベンション協会を訪問した。同市では税収の半分以上をDELL社に依存しており、財源確保の観点から、観光産業に着目し、中でもスポーツを主体とした産業振興を図っている。ラウンドロック市の観光キャンペーン概要や球場運営の説明から始まり、最後には収支状況についてかなり突っ込んで質問も出た。最初の研修ということで皆少し緊張気味だったが、アメリカの行政施策についてよく理解することができた。



201

The Dell Diamond視察

メジャーリーグのヒューストンアストロズ傘下のAAAチーム、ラウンドロック エクスプレスの本拠地球場。経営陣にはかのテキサスが誇る伝説の投手、Nolan Ryan氏が名を連ねている。

球場名のThe Dell Diamondは、ラウンドロック市に本社を置くコンピューターメーカーであるデル社が、球場の命名権を15年250万ドルで買い取ったため。マイナーリーグの球場ながら、家族連れで楽しめるよう、子供の遊戯施設や、テキサスの猛暑の夏季のためにプール施設まで完備されている。

野球の発祥地、アメリカの野球文化の裾野の広さに改めて驚愕すると共に、経済波及効果の大きさも日本の比ではないことを実感した。



Joint Austin Clubs 例会出席

例会は、教会を兼ねた集会所(ホール)で天井にバスケットボールの網があり、試合の時は下へ降りるようになっている。

集まったメンバーは30名前後、地区ホームページでGSEチームの参加例会に集まるように呼びかけているので、ガバナー地区委員長をはじめ他クラブからのビジターも多かったようだ。すでに知っているメンバーが多く居たので雰囲気は和やかに感じられ、食事はビュッフェスタイルで先に着いた者から食事をとっていた。

さて、プレゼンテーションでは、初めての経験であったが、比較的皆が落ち着いてジョークを交えながらのスピーチであった。ただ、笑って欲しい所ではとれず、またその逆もあったりして笑いの反応がこちらの思いと違っていったようだ。

プレゼンの後、団長の詩吟、品川団員の日本舞踊、全員の阿波踊りのパフォーマンスを行った。終了後、何人かに「Good job」と声をかけられ握手を求められた所を見るとお世辞だけでなく、まずは好評ではないかと思った。

多分、サンアントニオの大会で多くのGSEチームのプレゼンがあるので、

多分、我々 日本チームがどんなプレゼンをするのか、気になっていたのではないだろうか。



Austin Community College

午後3時、Austin Community college (ACC)を訪問。インターナショナル・プログラム・コーディネーターのTaylor氏より、ACCの取り組みについてのプレゼンテーションがあった。

テキサス州に7つのキャンパスを持つ、生徒数4万人のコミュニティカレッジ。

大学への編入コースは評判が高く、普通に大学に入学した生徒よりもACCから編入した学生のほうが成績が良いというデータもある。また、「良い教育無くして地域の経済発展はない」という信念のもと、大学のように狭き門ではなく、誰もが学べるようなコース編成や授業料を設けている。地域社会とのつながりが非常に強く、教育が受けられない→仕事に就けない→収入が得られない→地域経済に貢献できないという悪循環をなくし、誰もが教育を受けられる→仕事に就く→収入を得る→地域経済に貢献するという流れを作ることをモットーとしている。



2010年4月27日 (火)

オースティン市長表敬

テキサス州の州都オースティン市のLeffingwell市長を表敬訪問した。

歓迎のスピーチの後、オースティン市政について、環境都市・芸術都市として政策を進めていることなど、市長から直接お話を伺うことができた。オースティン市は日本の大分市とも姉妹都市提携をしている。

市長表敬終了後、Jim Butler産業雇用創造担当よりオースティン市が旧空港跡地を利用して、芸術、特に

映像産業振興を中心に行っている支援策などのお話を伺った。またテキサス州の自然を表しているというデザイン性の高い市庁舎内も見学した。



Rotary Club of Austin 例会出席

この地区では歴史の古いクラブ(1913年創立) 60番目のクラブを訪問した。メンバー数は約300人、当日の出席者は125人との事。

教会の複合施設のような所で開催された。食事をする時は20ドルを払い、ビジターは初回は食事なしの時は無料、2回目からは12ドルとなり、それは会員であっても同じように払うようである。

ちなみに年会費は235ドルとの事で、食事を合わせても年1200ドル程度と思われる。先日のクラブと同じようにビュフェスタイルであり、面白いとおもった。

例会の時の卓話者がすでに決まっていた所に、我々が割り込んだようになったので、10分程度の自己紹介しかできなかったが、2回目ということで、チームは慣れた感じで、ジョークも交えながらのスピーチができた。後半の卓話者の話は宇宙ステーション内の細菌感染の話題で、興味ある内容ではあったが、専門用語が多く中身を詳しく理解できなかった。スピーチの後いくつかの質問があり、途中で質問を打ち切ってもなお個人的に質問があり、関心の高さをうかがい知れた。



University of Texas (スポーツ施設見学)

午後、ホストの一人Maryが私たちのために持参してくれたテキサス大学のT-シャツに着替えて移動。テキサス大学のカラーであるオレンジとビッグホーンが特徴的。このTシャツはMaryが孤児院への寄付用にと集めていたものの一部。アメフト場とバスケットボールの練習場を見学した。

夜6時からテキサス大学内の野球場で野球観戦。テキサス大学オースティンキャンパスチームVSテキサス大学サンアントニオキャンパスチーム。6対4でオースティンチームの勝利。皆チームカラーのTシャツやグッズを身につけて熱狂的。ここAustinにはメジャーリーグの野球チームがないので大学野球が最も盛ん。テキサス大学は人気の高いチームだ。



Lyndon Baines Johnson Library & Museum

当初4月28日に見学予定だったが、当日行程がスムーズに進み余裕ができたことから、LBJ見学となった。1963年のケネディ大統領暗殺により、テキサス出身の最初の大統領となった、ジョンソン元大統領を記念したミュージアムである。大統領職を退いてからはテキサスで牧場を経営した元大統領は、婦人のLady Birdとともにテキサスでは大変人気が高い。

ジョンソン元大統領が活躍した60年代は、アメリカが世界的にその存在感を高めた時期であると同時に、国内では根強く残る人種差別に対峙していった、まさにアメリカの過渡期の時代であった。

ミュージアムでは、ジョンソン元大統領のワシントンでの執務室、生活空間などを再現し、Lady Bird夫人の野生動植物保護の活動なども伝える内容となっていた。テキサスはWild Flowerが有名で、Blue Bonnetなどお土産品のモチーフにも使われているが、こうしたテキサスの野草を守る活動をしたのがLady Birdだったとのこと。

ミュージアムでは当時の車やテレビなどの展示のほか、アポロ号が持ち帰った月の石も展示されており、アメリカの歴史を感じた。



2010年4月28日（水）

テキサス州議会議事堂視察

オースティンのランドマーク的な存在であるテキサス州議会議事堂を視察した。Rick Perry州知事表敬は公務によりかなわなかったが、上院議員Stephen E.Ogdenテキサス州上院議員の事務所を訪問した。議事堂は歴史的な建物で、職員の方に案内いただき、財務役員室や州務長官専用事務室、上院会議室、下院会議室、知事応接室、最高裁判所法廷など、普段は入室できないお部屋も見せていただいた。



午後:各自 職業研修

- 佐藤団長
小児歯科専門医見学
- 松永団員
The Groovy Dog (犬用ベーカリー製造販売ペットショップ)
Tomlinson's(テキサスのローカルペットチェーン店)
Walmart(全米最大のスーパーチェーン店のペットコーナー)

- Costco(会員制卸売小売チェーン店のペットコーナー)
- 大本団員
Texas University アジアンスタディ学部 日本語学科/Inlingua Austin
- 端山団員
Goodwill Industries of Central Texas/Computer Works
- 吉田団員
市役所訪問 市長と面談
- 品川団員
オースティン観光コンベンションビューロー
テキサス州政府観光局

2010年4月29日 (木)

ホストファミリーと別れる

Joint Austin North Clubs Meeting 出席

できるだけ多くのロータリアンにGSEチームを紹介したいとの地区方針で、4つのオースティン市内のジョイント例会に出席した。

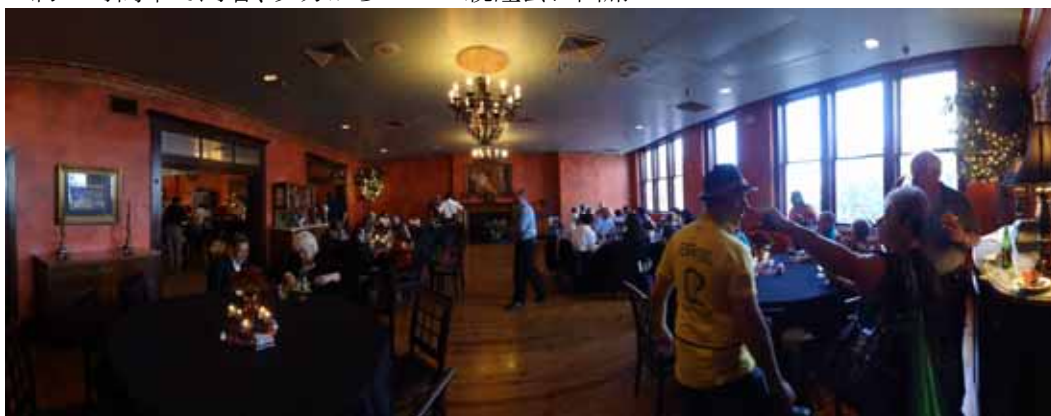
30分のプレゼンと15分のパフォーマンスのフルバージョンで行った。

詩吟が思ったよりも評判が良いようだ。



サンアントニオに向けて出発

約1時間半で到着、夕方からGSEの親睦会に出席



2010年4月30日 (金)

MultiDistrict Conference 出席

テキサス州は日本の国土の約2倍の広さに10の地区(District)がある。

今回はそのうちの6地区が集まって「TEJAS」Multi-District Conferenceが開催された。かつて大阪で関西4地区が集まって合同地区大会を開催したことがあるが、テキサスでも前例がなく初めての試みであるとの事。

その時期に合わせて各6地区に7つのGSEチームが各国から来ており、本会議のオープニングセレモニーでの紹介の後、昼食をはさんで各チーム30分与えられた時間でプレゼンを行なった。GSEチームは、インド(2チーム)、アフリカ(マラウィ・モザンビーク・ザンビア・ジンバブウェ)、ブラジル、タイ、フィリピン、日本の合計7チームでそれぞれが自分達の地区を紹介した。我々も女性は着物、団長は浴衣の姿で気合を入れてプレゼンに臨んだ。他チームに比べてもプレゼン内容はまとまりがあり、団長の詩吟、全員の阿波踊り、品川団員の日本舞踊のパフォーマンスも好評であったようだ。

ランチプログラムでは知り合い同士が固まらないようにペアーで分かれて別の席に着くシステムになっており、他人との親睦を深めるよい方法だとおもった。食後のスピーチはJames P. Owen氏の「Cowboy Ethics」という話で、いかにもテキサス人に似合いそうな内容であった。

なお、大会期間中は国際大会のように各分科会に分かれていろんなテーマで話し合いが行なわれていた。



2010年5月1日(土)

サンアントニオ市内観光

地区大会最終日、アメリカでも有数の観光都市サンアントニオを市内見学することができた。ヒスパニック文化の影響を多く受けたサンアントニオには、市内いたるところに古い建物がある。年中温暖で、アメリカにいながらにしてヒスパニック文化を感じることができるとあり、全米から観光客がやってくるのこと。リーマンショック以降、国内観光客が減り空き店舗が増えるなど地元経済に打撃となっているとのことだったが、見学当日は、チャリティマラソンが行われていたこともあり、多くの観光客でにぎわっていた。



The River Walk

サンアントニオの主要な観光スポット。乗員30人ほどのボートに乗り込むリバーツアーで、1.3マイルの水路コースを約40分で一周した。ボートから眺める周辺景色は歴史的建物やカフェ、レストランなどがあり、ところどころに橋や噴水があり、水辺を活かした観光を存分に体験することができた。河岸は歩行者用に整備されており、ボートに乗らなくても、歩いて水辺を楽しむことも可能。ボート一台に操作員兼観光ガイドがつくが、私たちのガイドの説明は早口で、アメリカ人でも何を言っているか理解できなかったとのこと、風景は十分に美しかったので、ガイドさんのレベルだけが残念だった。

ボーツアー後、橋の下にあるレストランでテキサスとメキシコ料理を融合した食事TexMexを楽しんだ。



The Alamo

サンアントニオ市中心部にあるアラモの砦は、特にテキサス人にとっては聖地のような場所である。1836年にメキシコ軍隊との戦いで、189人が戦死した場所であり、年間250万人以上が訪れる。現在残っている砦は一部だけで、その歴史的重要性からすれば、かなり小さく感じられた。

砦の外側の庭には、4000人のメキシコ軍隊に対し200名以下の兵力で果敢にも戦ったというアラモの歴史に感銘を受けた日本人が、アラモとよく似た戦況にあった日本の長篠の戦いについて寄せた碑があり、意

外なところでアラモと日本とが重なった。



Tower of the Americas

高さ750フィートの最上階にサンアントニオ市内を見下ろす展望台がある。1960年に万博が開催されたときに整備されたHemisFair Parkの中央にある。

周辺に高い建物もなく、360度サンアントニオ市内を楽しめる。高速道路を挟んだ反対側には、アラモドーム・スポーツ・コンプレックスがあり、当日はJohn Straitという有名なカントリーミュージック歌手のコンサートがあるとのもので、会場周辺の道路が大渋滞しているのが見えた。さすがカントリーの本場テキサス。



観光案内所

アラモ砦からリバーウォークにいたる観光スポットの中心にあり、観光都市サンアントニオならではの感じだ。

センター内はかなりスペースも広く、観光案内だけでなく土産物など物販もしていた。



馬車

サンアントニオでは車道を馬車が走っている。日本の人力車に似た感じで、観光風物として街並みに溶け込んでいる。

当日のサンアントニオは気温が30度を超える暑さで、歩き疲れていたところ、絶妙なタイミングで馬車が通りかかった。馬車に乗ったのは初めての経験だったが、ぱかぱかと心地よく目的地まであっという間だった。



2010年5月2日(日)

Mexiaへの移動日



2010年5月3日(月)

Navarro College & The Cook Center

The cook centerというのはNavarro collegeのキャンパス内にある学生ホール、ミュージアム、プラネタリウムなどが入った施設。一般の人でも利用できる。到着後、Stringer副学長よりカレッジの歴史と特徴についての説明があった。

このカレッジは生徒数10,000人。ここCorsicanaのメインキャンパスのほかにも3つのキャンパスがある。第二次世界大戦時に空軍のパイロット養成学校だったところをそのままカレッジに。

他のコミュニティカレッジと同様に大学への編入コースと職業訓練コース(日本でいう専門学校)を主とする。日本と大きく違うのは大半の学生がキャンパス内の寮で生活しているところ。公共交通機関がない車社会ならではの特徴。

その後、イベントコーディネーターのCaroleさんの案内でCivil war MuseumとWestern art Museumを見学。南北戦争にまつわる展示物(当時の遺品、手紙、武器)やネイティブアメリカンに関するアート作品などを見物。最後に同施設内のプラネタリウムへ。全体的にゆったりとした校風。カレッジの学生ホールなども一般市民に有料開放しており、地域に密着した学校だった。



Rotary Club of Navarro Rotary Club of Corsicana 合同例会出席

コルシカーナ市での2つのロータリークラブ例会に出席。

場所はレストランの一室で、通常は15人程度のメンバーだが合同例会のため、予備椅子をわざわざ用意していた。

ガバナー・ミニー（インド人）が訪問していたのと重なった。その後、彼が自ら車を乗せて近くのところまで連れて行ってくれた。

レストランの壁をスクリーンにしてプレゼン、そして狭い場所でのパフォーマンスがあったが、皆、楽しんでくれたようだ。



Vaudeville劇場、Corcicana Visitor Center 視察

例会に参加後、The Palace という古い劇場を視察。1930年代にオープンし、1950年代に閉鎖され、老朽化した劇場を、民間施設がリフォームすることを条件に、市から年間1ドルで借りて運営しているとのこと。その後、Corcicana Visitor Center へ行き、テキサスの最重要産業である石油産業についてのショートフィルムを鑑賞。



Pioneer Village視察

CorcicanaとNavarro Countyの開拓時代である1840年代頃からの古い建物を移設した施設で、それぞれの

建物に当時の様々な生活用品や、収集品などを展示している。(当時の家屋や、1851年の雑貨屋、鍛冶屋、1838年の交易郵便局、1860年の奴隷収容施設など。)

地元Corsicana出身の著名なカントリーミュージシャン、Lefty Frizzellの銅像と博物館も併設されている。



Collin Street Bakery

当初の予定ではCollin Street Bakery やRussel Stover Candy Companyの視察に行く予定だったが変更されたようで、Collin Street Bakeryに行き、クッキーやケーキなどを一般客として食べるだけになってしまった。因みにCollin Street Bakeryのデラックスフルーツケーキはとても有名で、日本を含む世界約150カ国に出荷されているという。



2010年5月4日 (火)

ナチュラルガスサイト(Anadarko 社)視察

テキサスの他の地域と同様に、Fairfield地域一帯では石油が産出されていたが、今ではほとんど枯渇しているため、今は天然ガスの採掘が盛んになっている。

訪問した Anadarko社は、天然ガス採掘とパイプラインを通じたアメリカの都市部への販売を行っている会社である。テキサスでは、土地の権利の他に地下鉱物の権利(Mineral Rights)があり、この会社では地下鉱物の権利交渉もおこなっている。

訪問地は、Fairfield地域一帯に点在するガス田から天然ガスを集め、精製後、各地域への送出手をやる拠点であった。ここで、人工的に地震波を起こして地下構造を調べる方法や、ボーリング後の天然ガスの採掘方法、有毒ガス(H₂S等)の処理方法、無線通信による各ガス田の管理方法 等を学び、その後 精製・分配施設等を見学した。



A GROUP STUDY EXCHANGE FROM JAPAN visited Anafarke and Luminant's Big Brown Plant in Freestone County. (Submitted Photo)

Fairfield Rotary Hosts Students from Japan

An Exchange of Education

The Fairfield Rotary Club recently hosted a group study exchange (GSE) team from Japan. The Rotary

fighter's
B-B-O
TO BENEFIT
THE FIRE DEPARTMENT
BUILDS AMERICA
10 starting at 9:00 am
For \$7.00 including Drink
Timings:
to hold for \$2.00
ORDER FORM

By Richard Hill

新聞記事

Rotary Club of Fairfield 例会出席

この日は食事だけで、プレゼンテーションはしなかった。つまり、我々が食事をとる場所として例会に参加したようなものだ。

後から聞いた話によると、プレゼンテーションは、週に3回まで(1エリア3回)という決まりがあるため、このミーティングではプレゼンがなかったらしい。

メキシコ料理店ででの例会で、一般の人と一緒に料理を取ってきてその店の一角で例会を開いている。

チームの自己紹介だけはしたが、一緒に付いてきてくれたリンさん(Mexia R.C)に GSEとは何かなど初歩的な質問をしていたので、クラブによってはGSEの知名度が低いことが分かった、彼もそれを嘆いていた。

メーキャップカードが置いていないので、週報に出席のサインをしてもらった。



発電所(Luminant Power社)視察

Luminant Power社はテキサスの各地で天然ガス、原子力、石炭による発電を行っている会社である。

この日 訪れた火力発電所(Big Brown Power Plant)は、露天掘りの石炭鉱山(Big Brown Mine)と冷却用水源(Fairfield Lake)のすぐ横にあることで、効率の良い発電作業が行える、特徴的な発電所である。

炭鉱には地下15メートルから60メートルの間に平均 約2メートルの厚さで石炭が存在しており、これを巨大なクレーン(ドラゴン)を利用して露天掘りで採掘しながら 併設された発電所で1日2万トンの石炭を燃やして1

日130万キロワット(50万世帯分)の発電をしている。

採掘の跡地は、埋め立て後に植樹を行ない 森・放牧地・農耕地などに再生する所までがこの鉱山会社の仕事となっている。

Big Brown Mineは1970年頃から操業が始まり、現在までに1億7千万トンの石炭が採掘されている。炭鉱を案内してくれたMaggieは祖父の代からこの鉱床で働いている3代続く炭鉱一家であった。



2010年5月5日 (水)

Texas State Technical College (TSTC)

この日は午前中にカレッジ二つと大学一つを見学するというかなり強行なスケジュール。各校での滞在時間は約1時間。本当に回れるのだろうかという不安のまま、まずはTSTCへ。日本の専門学校に非常に近い。ここは第二次世界大戦までは空軍基地だった場所。生徒数7000人。トヨタからも設備投資を受けておりトヨタ専門のコースで学び雇いで貢献、という流れができています。同様に地元企業からの出資により運営しているプログラムが数多くあり、予算の半分以上を企業からの資金などで賄っている。ここも地元産業とつながりが強い。時間の関係で、駆け足気味での見学だったが、カリキュラム、設備ともに非常にしっかりした学校だった。



McLennan Community College (MCC)

TSTCを時間通りに出てMCCへ。はじめにMartinez副学長より、カレッジについての説明があり、専用のカートに乗ってキャンパス内を案内してもらう。生徒数7000人。主要なコースは他のカレッジ同様大学への編入コースと、職業訓練、さらに生涯教育のためのコースがあり、大人のためのスキルアップに貢献してい

る。そのほか興味深いシステムは、提携している6つの州立大学から講師を派遣してもらい、このカレッジに通いながら大学の単位が取れるというもの。この近辺には州立大学が少なく、編入するには住み慣れた地元を離れなくてはならないという学生の悩みを解消する画期的なプログラムだ。州立の学校だがカウンティからも予算をもらっており、改築などが進んでいた。そのせいか、見学の後半は新しい建物や施設の紹介（自慢？）が多かった。予算を獲得できたのがよっぽど嬉しかったのだろう。



Baylor University

MCCが長引き、予定より1時間近く遅れて到着。インターナショナルスタディ専攻の2回生の学生が校内を専用バスで案内してくれた。生徒数20,000人の私立大学。全米一の金持ち大学というだけあって、学生ホールはホテルのロビー並みの豪華さ。学生たちもどこか余裕のある雰囲気。イメージカラーはグリーンで、マスコットはクマ。教員と学生はスポーツ施設やプールなどはすべて無料で使用できる。また病院や警察もキャンパス内に。心療内科は無料。主に施設の見学で終了。



午後

Baylor Universityの学食で昼食後、Dr Pepper MuseumとTexas Ranger Museumにそれぞれ3人ずつに分かれて訪問。Dr Pepper Museumには品川、大本、端山が、Texas Ranger Museumには佐藤団長、松永、吉田が行くことに。当初、佐藤団長以外はTexas RangerはメジャーリーグチームのTexas Rangersのことだと勘違いしていた。



Texas Ranger Hall of Fame and Museum視察

テキサスレンジャーというのは、テキサス州公安局に属する法執行官で、1823年頃にインディアン襲撃に対抗する形で発足した民兵組織を源とする、アメリカ最古の州管轄法執行組織。因みにテキサス州アーリントン拠点とするメジャーリーグのテキサスレンジャーズは、この組織よりチーム名を戴いている。

テキサスレンジャーになるための資格は、8年以上の法執行官としての経験に加え、2年以上のテキサス公安局の職歴が必要とされる。

館内ではTexas Rangerについての映像を観て、使用していた銃などの展示品を見て回ったが、スケジュールの関係上、時間が短く駆け足での視察になってしまったのが残念。



Waco Dr Pepper Museum

Dr Pepperは1885年に、Charles Alderton がテキサスの Waco (ウェイコ) にあったMorrison's Old Corner Drug Store で 薬剤師として働いているときに発明した炭酸飲料で、アメリカでもっとも古くから有るメジャーな炭酸飲料として知られている。

この博物館は、1906年にWaco市に建てられて使われなくなっていた ボトリング工場(The Artesian Manufacturing & Bottling Company)を修復した建物を利用して作られていて、博物館の中には昔の井戸がそのまま残っていた。

館内には、Dr Pepperの歴史や昔の瓶、模倣品のリストなどが並べられているだけでなく、博物館の Twitter やYouTube の宣伝まであったのは、炭酸飲料の博物館らしい点であった。



Mammoth Site視察

2009年末オープンの新しい施設。1978年に発掘が開始されたコロビアマンモスの発掘現場がそのままミュージアムになっている。コロビアマンモスは短毛の大型種で、最後に絶滅したマンモスとして知られている。

ここでは6頭以上の親子のマンモスの化石が発見されており、全米において最初にして唯一の、更新世(※)のマンモスの子育ての群生化石だという。将来的には、Waco Mammoth財団の協力を得て、公共公園化を目指している。※更新世(Pleistocene)…約180～160万年前から約1万年前までの地質時代で、この間のほとんどが氷河時代であった。



Rotary Club of Waco Lake Brazos and Waco Lake Sunrise 合同例会出席

初めての夜例会の参加

例会場所はパブのような所で、軽く一杯飲んでから5時より始まり6時に終了。

夕食は通常なしで、家で帰って食べるとのことであるが、今日は特別に

隣のダンスホールの様な所を借りてビュッフェスタイルの夕食であった。

メンバーは15人ほどで、女性会長(30代後半?)はキリッとした感じでリーダーシップがありそう。

次期会長は、28才のハンサムな独身男性、彼だけがスーツ姿でネクタイを締めていた。他は何人かの女性

も含めて服装はまちまち、皆エンブレムをつけていないので、ロータリアンなのかどうか見分けが付かない。

今までの例会では「4つのテスト」の唱和がいつもあったが、あえてここではやっていないとのこと。この人口

13万人のWaco の中心はWaco R.C であるが、300人近くのメンバーなので、

小クラブとしての特徴をだしているとのことである。

我々を歓迎して、女性メンバーには花束、団長にはここでしか製造していないという地元ウイスキー、そして男性には缶入りのケーキのような物をくれた。帰って開けてみたら、なんとテキサスレンジャー用のジャックナイフであった。ユニークなクラブとして記憶に残る。



2010年5月6日 (木)

Mexia Economic Development Corporation / Mexia商工会議所事務局長訪問 Limestone County Courthouse

近くのレストランに集合し、そこでそろって朝食。

朝食後Mexiaの経済開発局長のTommy Tucker氏と商工会議所事務局長のLinda Archibald氏のオフィスを訪問。2つは同じ建物内にあり、企業誘致や産業振興などの業務を連携して行っている。特にMexiaの商工会議所は観光部門も兼務している。

Mexiaは、オーストリアからガラス工場を誘致したり、国内からもパイプラインのバルブ工場やタンク工場などを誘致するなど、いくつかの企業誘致に成功している。その結果、Mexiaは、人口6,500人ほどの小さな市で、DallasやWacoなどの大都市に近いにもかかわらず、人口の流出もなく失業も少ない景気の良い街となっている。

その後、Limestone郡の郡庁がある、Mexiaの隣の市であるGroesbeckにあるLimestone County Courthouseを訪問。ここも古い建物をリニューアルして現在も裁判所として利用している。また、建物内には、現在は使用されておらず倉庫になっていたが、かつての拘置所なども残されており興味深い。しかし、Groesbeckは郡庁がおかれ、かつては郡の中心地であったにもかかわらず、現在はMexiaよりも衰退していた。これは産業振興の失敗である。特に各市の独立性、独自性が強いテキサスでは、その差が顕著に現れていた。



Rotary Club of Mexia 例会出席

Mexia(マヘィア)市は小さな町で、周辺のカウンティを加えても、3万人程度。他の大都市の人は、「何でそんな所に1週間も滞在しているのか？」という顔をするような田舎町である。

この街の歴史はかつては、石油ブームで人口も3倍くらいの規模にふくれあがり、無法人も流れ込み、今でもかつての西部劇の街を思い起こすたづまいを残している。

今、市のイベントとしてロデオ大会を開催しているのもうなづける。さて、Mexia R.C は、30人足らずのメンバーではあるが、創立は1923年と古く何とこのクラブから、4人の地区ガバナーを輩出し、今もガバナーノミネーターがいる。

団長のホストファミリーであるビリーもリンダも夫婦でこのロータリーのメンバーである。ビリーはクラブ会長の時に街の一角の建物を買って、それをクラブの例会場として寄贈した。そして、48才の時に地区ガバナーとなり、その後、数年は国際協議会の研修リーダーとしてビチャイラクトル パスト会長 の時代に活躍したそうだ。

例会は、12時より開催された。

部屋の奥に調理場があるので、例会には施設より、調理人を派遣してもらっている。食事をテーブルに運ぶ男性は身障者であるようだ。

この町にはもう一つRCが有って、合計週2回だけこの部屋が使われている。



Texas Country Kennels視察

当初の予定では、Animal Rescue Adoption Shelterに行く予定であったが、予定が変更され、Texas Country Kennelsへ。

いわゆるペットホテルであったが、設備は広く、約30位の収容ケージがあった。一泊15ドル。

彼らはブリーダーでもあり、ゴールデンレトリバー、キャバリエ、ボクサーなどの犬種を繁殖させており、ボクサーのチャンピオン犬を輩出している。職業というよりは、むしろチャンピオン犬を育成することが目標という、趣味のような側面も持っており、繁殖させた犬は安価で、大切に飼ってくれる飼い主を探して譲渡しているとのこと。(本業は、鉄骨造建築会社経営のようである。)

テキサスのペット事情についての詳細は、松永団員の職業研修の欄にて。



Gary Walker Cutting Horses視察

単に乗馬体験が出来る場所かと思っていたが、カッティングホースという日本では全く馴染みのない馬術の視察であることに、現場で説明を受けてから気がついた。

カッティングとは、人馬が短時間で牛を群れから引き離す能力を競う馬術競技で、元来、アメリカ西部の牧場で、諸事情(去勢、仕分け、伝染病予防接種など)により特定の牛を群れから引き離す必要性から発展したものである。

ルールを簡単に説明すると、2分30秒の間にカッターと呼ばれる競技者が、2～3頭の牛を群れから引き離し、カッターが牛を引き離している間に、ハードホルダーという2騎の人馬が、牛の群れをまとめる。(合計3名が1チーム) 審査員がその技術を審査し合計点数を競うというもの。

1946年に全国カッティングホース協会 (NCHA, National Cutting Horse Association)が発足し、アメリカだけではなく、オーストラリアやカナダ、欧州でも盛んに行われている。

Gary Walker氏のカッティング技術は素人が見ても素晴らしく、狙った牛を次々と群れから引き離した。

我々GSEチームに、カッティングの乗馬技術があろうはずもなく、乗馬経験のある吉田団員以外は、最後に手綱を引いてもらい馬に乗せてもらった。乗馬体験後、事務所でGary Walker氏のカッティングホースのVideoを、本人の解説付きで延々と見せ続けられたのには…そろそろカッティングしてくれと願ったのは私だけではあるまい。



2010年5月7日（金）

Skeet Shooting体験

午後の予定が全くなかったことから、ホストファミリーのJohn Stubbs氏が、Skeet Shooting に誘ってくれ、団長を除くチーム全員で体験することに。

Skeet Shootingという言葉に馴染みが全く無かったが、所謂“クレー射撃”のことで、粘土製の素焼きの皿を専用のクレー発射機で空中に飛ばし、それを射撃するというもの。個人的にはハワイの射撃場で、銃口が鎖で固定された銃での射撃経験はあったものの10年以上前の話で、他のメンバーも初体験の人が多かった。

John氏私有山林の奥地でセッティングし、2連、3連の散弾ライフルにて射撃体験。男性陣は、コツを掴んだ後、空中のクレーに当てることが出来たが、女性陣は射撃音や反動も含めて、かなりのカルチャーショックを受けたようである。その他にも6連リボルバーや、15連オートマチック銃も撃ったが、こちらは散弾ではなく弾丸であることと、ライフルの命中精度は有していないため、なかなか的に当てることが出来なかった。

この体験もそうだが、滞在中に銃の所有と犯罪率の因果関係について人々の考えを聞き、テキサスの激動の歴史(※)を学んだりして、銃というものが良きにつけ悪きにつけ、アメリカ人、特にテキサス人にとっていかに身近なものがあるかということを実感した。



2010年5月8日（土）

午前中:打ち合せ

午後:ボート

ボートでMexia湖を周遊、かなりスピードが出ていた。



Kirby's Barbecue

14時Kirby's BBQ着、それぞれのホストファミリー と再会し、一緒に最後の昼食&記念撮影。



Old Fort Parker

15時過ぎにKirby's Barbecueを出発し、Old Fort Parker へ。

ここは1836年、パーカーという開拓民の一家がインディアンに襲撃、虐殺された砦である。

時9歳のシンシア・アン・パーカーという娘が、インディアンに連れて行かれたのだが、その後、養女となりコマンチ族の酋長と結婚、生涯をコマンチ族として送ることになったというテキサス開拓民とインディアンの激動の歴史を物語る場所である。



2010年5月9日（日）

移動日



2010年5月10日（月）

Rotary Club of Space Center 例会出席

NASA 見学前の昼食にスペースセンターR.Cに立寄る。

NASA関連の15000人ほどの住民と、ヒューストン郊外の人々はそのクラブのテリトリーにあるようだ。

会場はゴルフ場の立派なクラブハウスで開催されていて、窓からゴルファー達がカートでコースに行くのが見える。50人ほどの出席者で、雰囲気は日本のR.Cの例会に似ていた。

最初に我々を出迎えてくれたのが、スーツを着たハンサムな東洋人らしきロータリアンで、昼食後も我々をNASAへ連れて行ってくれた。話して分かったことは、彼は4才でカンボジアから来てそのまま帰らず(あるいは帰られずに)ヒューストンの医大を卒業して今は眼科医として開業している。

名刺を見ると、彼は4年前に36才の時クラブ会長をやっていたことが分かった。彼がNASAで働いている中国人系の人と友人で、その縁故のおかげで、NASAでの特別な見学ツアーを体験することになる。



NASA

待望のNASA視察ということで、出発前から興奮気味。それというのも、ロータリークラブでの大阪紹介プレゼンテーションにて、女性宇宙飛行士の山崎直子氏を紹介しており、ミッション(STS-131)を終えたばかりの彼

女に、地元ロータリアンを通じ面会を申し込んでいたからだ。

彼女はロータリークラブの国際親善奨学生として、メーランド大学カレッジパーク校にて学んだ経歴があり、我々のNASA視察も決まっていたので、佐藤団長の提案によりプレゼンで紹介する運びとなった。結局、視察当日、彼女は不在のため面会は叶わなかったが、それを差し引いても素晴らしい視察ツアーとなった。

ジョンソン宇宙センターは1961年に有人宇宙船センターとして設立され、友人宇宙飛行の研究開発、スペースシャトルや、国際宇宙ステーションの運用・管制、宇宙飛行士の訓練など、極めて重要な役割を持つ宇宙センターである。宇宙空間を想定した訓練用巨大プールがあり、プールサイドに退役宇宙飛行士(!)が現れたので記念撮影。

実物大のスペースシャトル模型が設置された場所には、実際に宇宙飛行士が訓練に使用するスペースシャトルのミッションシミュレータがあり、そのコクピット内に入ることも許可された。

その後、アポロ計画時に使用されていた旧ミッションコントロールセンター内への入室も、1969年生まれの私には非常に感慨深かったが、圧巻だったのが国際宇宙ステーションと交信中の現ミッションコントロールセンターへの入室が実現したこと。これは今までのVIPツアーですら例のなかったことで、改めてロータリークラブの影響力の大きさを垣間見た瞬間であった。

1981年から続いたスペースシャトルプログラムは、2010年、ミッションSTS-134を最後にその歴史に幕を閉じる予定だが、有人宇宙船プロジェクトは今後、民間に移行される予定。2008年末、NASAは国際ステーションへの商業軌道輸送サービスの契約を、Space Exploration Technologies社と、Orbital Sciences Corp. の二社と締結した。



2010年5月11日 (火)

Flatonia Painted Churches

Flatonia RC会員で、GSE団長を経験されたことのあるKilk Pateさん、奥様のJudy Pateさんに案内いただき、FlatoniaにあるPainted Churchを見学した。Flatoniaは、19世紀中ごろに当時のチェコスロバキアから多くの人が移住し、また第2次大戦で収容されたドイツ人捕虜が定住したことから、ドイツ系、チェコ系住民が多い地域である。

コミュニティが大きくなるにつれ教会が建てられたが、現在は建立から100年以上が経ち、寄付を集めて改修が進められている。

なるべく地元テキサスで取れる資材を利用して建てられたとのことで、牧場地が広がる風景に溶け込んだシンプルながら凜とした美しさを持っている教会であった。



Rotary Club of Hallettville 例会出席

Hallettville(ハレッツビル)の人口は6,000人 周囲の郡を含めて1万5千人ほどの地域にある HallettvilleR.Cを訪問した。

20人足らずのメンバーでビジターを合わせて20人から25人ほどのロータリアンが例会場である教会の集会場に集まった。広いホールなので、部屋の半分のみを使用している。

誰が会長なのか分からず、結局 会長は欠席で会長エレクトの黒人系の銀行マン(支店長クラス?)が例会をリードしていた。

プレゼン、パフォーマンスに続き、質問時間をはじめて設けたが、いろんな質問があつて、例会の時間は1時間を15分以上過ぎていたようだ。

会員は、30代の女性、何をしゃべっているか分からない老人、プードルをつれた中年の人まで様々な年齢層の人たちの集まりであった。



LAVACA County Courthouse

説明者: Merle Richardson 現場責任者、Ronald L. Leck 裁判官

午後からはHallettsvilleの中心にあるLAVACA群裁判所を見学した。ブッシュ大統領がまだテキサス州知事だった当事、テキサス州に254あるCountyのそれぞれにある裁判所の老朽化した建物を、オリジナルのデザインに戻すという法案が通り、それをもとに改修工事が進められている。

周辺の歴史的建造物を保護し、クリスマスライトイベントなどで町の活性化を図っているとのことでした。当日は第33代目のRonald L. Leck裁判官も加わって自ら説明していただいた。



Nutrena Migl Grain and Feed社視察

Nutrena Migl Grain and Feed社を訪問。YoakumやHallettsvilleを含むLavati, Dewitt, Gonzalesの3つの郡では、広大な牧草地が広がっている。この周辺はテキサスの中でも特に牛の数が多く、全米有数の畜産地域。

Nutrena社では家畜用の飼料のほか、化学肥料、除草剤、ドッグフードや鹿の角を育てる餌なども扱っており、ワンストップショッピングを目指している。また自社で車を改造し除草剤散布サービスも提供するなど、牧場経営全般に入り込むビジネス形態を広げている。



カントリーミュージックの夕べ

Yoakumロータリークラブ主催のカントリーミュージックの夕べに招待された。

これがすごいのは月に一度の開催が32年間も続いているということである。参加者は圧倒的にお年寄りで、

ナーシングホームの人もやってくる。今回は200人くらいだが平均400人、多い時は1500人の参加者があったそうだ。

会場は地区の公共のホールなので冷暖房費とあとは広告代程度の経費である。出演者はボランティアの楽団とその時々ゲストプレーヤーが加わる。特別出演者はたとえプロであっても無料である。そのため4\$のチケット代(食事する場合はプラス6\$)で充分やっていけるどころかクラブへ余剰金がでるらしい。今回の特別出演はボーカル、楽器演奏者、12歳と9歳の姉妹のフィデル(バイオリン)の演奏があった。曲目は前後半あわせて34曲。カントリーウェスタン以外にも目先をかえてブルース、ハワイアン、ジャズなどいれている。私の知っている「テキサスの黄色いバラ」など何曲かあった。

このような形で定着していったのもリーダーである司会進行を務めるジムさんと奥さんの貢献が大きい。最初の頃は出演者を自宅へよんで食事を毎月10年間続けた事もあった。また、特別出演者との協演はぶっつけ本番。たまにはひどい出演者もいて失敗したこともあったなど苦労話もホストファミリーなのでいろいろきくことができた。

いずれにしてもロータリーの社会奉仕活動としても素晴らしい実績があり、各地にある似たような催しもこれがモデルであり、地域文化活動におおいに影響をあたえているともいえよう。



2010年5月12日(水)

Boedeker Plastics and Kaspar Wireworks訪問

最初にBoedeker Plastics社を訪問。同社は1974年にHoustonで創業し、1984年に現在のShinerへ移転してきた企業で、プラスチックの製造ではなく卸しをしている。また、多角化を進め、1996年からプラスチック製品の加工も開始している。納品先は、国外が約20%にとどまっているのに対し、国内が約80%で、そのうち半分がテキサス州内となっている。

このように、プラスチック製品の加工品などでも、国内企業が国内で競争力を持っているということは、納品の時間的な優位性や独自の技術力の高さだけでなく、アメリカ国内での需要の規模がそれだけ大きいということが分かる。これはプラスチックの加工品だけでなくすべての産業においても同じだと考えられる。

次にKaspar Wireworks社を訪問。同社は1898年に牧場で使用する鉄条網を作る企業として創業し、現在は自動車のバンパーに取り付ける牛よけのグリルガードが主力商品。その他、新聞自動販売機は同社が開発し、現在国内で90%のシェアがあるとのこと。とりわけ、鉄でできたグリルガードはかなりの重量があると思われ、いくら牛との衝突の危険性があるといえど、燃費を考えると日本人からはあれを車に取り付けることは考えられない。



Rotary Club of Shiner 例会出席

クラブ週報によると、創立は1946年。メンバー数は23人のうち会長経験者が14人と半分をしめ、パストガバナナーも輩出している古いクラブである。

会場はレストランの2階で開催され、当日の参加者はビジターを含め15～20人程度。12時点鐘とともに、お祈り、国旗への忠誠の後、ブッフェスタイルで食事。たいした連絡事項もないので、食事もそこそこにプレゼンをはじめる。週報は発行されるがビジターカードはなし。先ほど訪れたワイアープロダクトのオーナー David さんが例会を仕切っておられた。

会費は食費が月40 \$、分担金などが年32 \$、総額年512 \$、日本円で5～6万円で、非常に安い年会費に思えた。



Spoetzel Brewery視察

午後からは、Spoetzel Brewery社を訪問。

同社のShiner beerはテキサスで最も有名な地ビールで、Shinerは小さな市だがShinerという地名はテキサスの人なら誰でも知っている。ビールを試飲後、他の訪問者たちと一緒に工場内の視察。平日の午後にもかかわらず多くの人がビール工場を訪れていたのには驚いた。

15時頃には日程が終了し解散となる。その後は各自ホストファミリーとの時間を過ごす。



2010年5月13日 (木)

Leather Factories

午前中、佐藤団長は歯科医訪問。 残りの5人は皮の加工工場へ。

初めに肩から銃をぶら下げる製品を作っている工場、次に馬の鞍をオーダーメイドしている工場へ。どちらもデコレーションが面白い。

しかし、銃の肩下げも馬の鞍も国内あるいは州内向けの製品(明らかに輸出向けの製品ではない)。それでも成り立っているということは、やはり国内に相当の需要があると思われる。我が国とは需要の規模が違う。その辺にアメリカの強さを感じる。



Rotary Club of Yoakum 例会出席

1928年創立(古くて 歴史のあるクラブ)

現在 41名 会員 P.D.G の Jim Witte 氏を中心によくまとまったクラブのように感じられる。前述のShiner R.C と同じ程度の会費ビジターフィー \$6 平均年齢 55~60才ぐらい。若い会員も加わっている。



Cow Roping Demonstration

午後から市内のロデオアリーナでCow Roping Demonstrationを観る。Cow Ropingとは、2人1組でそれぞれ馬に乗り、輪を作ったロープを頭上で回転させながら牛を追いかけて、1人が牛の首に、もう1人が牛の足に投げたロープを絡ませるという競技である。日本人にとってロデオとは、牡牛に乗るBull Ridingをイメージするが、Cow Ropingもロデオの1種である。

デモンストレーションをしてくれたのはJarrod and Carly Long夫妻で、Jarrod Long氏は牧畜が盛んなYoakumでも少ない專業のカウボーイである。彼の話では、Cow Ropingは単なる競技ではなく、今でも牧場で怪我をしたり病気になったりした牛を群れから引き離し、押さえつけて治療等を行うために必要な技術であるとのこと。しかし、片手で馬を操り、走る馬の上から逃げる牛の首や足に正確にロープを投げる技術は極めて難しいと思われる。



Jim and Louise Witte氏 宅でのホームパーティ

佐藤団長は浴衣、女性2人は着物を着て参加。

Cow Ropingの準備の為に、ランチミーティングで我々のプレゼンを見られなかったJarrod and Carly Long夫妻に、この場を借りてプレゼンテーションを行ない、余興も披露。



2010年5月14日（金）

Southwestern University

午前中Yoakumのホストとお別れし、最後のエリアGeorgetownへ。テキサスへ来て初めて本格的な雨に会う。傘をかりてキャンパス内の施設を見学。生徒数1250人の私立大学。大学院はなく、こじんまりした学校だが、緑が多く閑学のような雰囲気だ。

主となる学部は、心理学、生物学、ビジネス、コミュニケーションなど。他にもファインアート学部用の劇場やホールなどが充実している。バイクプログラムというものがあり、キャンパス内の各所に自転車が置いてあり学生や教員など自由に使うことができる。副学長の奥さんのアイデア。学生寮も完備。全学生の85%がキャンパス内にある寮に住んでいる。日本ではふつう最寄り駅などにアパートを借りて住むのが一般的だろう。そのせいか、学生ホールなどキャンパス内のレクリエーションの設備が充実している。今後は留学生の受け入れを強化したいとのこと。



Rotary Club of Georgetown 例会出席

ジョージタウン市は、約48,000人の町に3つのR.Cがある。多分、ジョージタウンR.Cは、その中で一番大きくて歴史も長い。創立1962年 会員は114人。通常、70人～80人が出席。

最初に車で遠路迎えに来てくれたのがパストガバナーで、G.S.E元団長である Geneさんであった、結局彼が一週間 我々の世話をしてくれた。彼はかつてドイツへG.S.Eで行った経験があり。このプログラムのことを熟知していて、あまりハードなスケジュールを避け、土曜日の午前中は我々チームだけのミーティング、日曜は家族とのフリータイムにあてて頂いて、個人的にもありがたかった。

例会場は教会であるが、2年前に別館のホールができ 設備も新しく、スクリーン、舞台もあり、今までの中で一番立派な例会場であった。

最初の予定は30分の時間であったが、45分はやりたいとの希望と、ヨーカムのロータリアンもフルバージョンでやるように言ってくれたので、車で向かう途中で電話で担当者に連絡して、O.Kをもらい、一般参加者もできるだけ 早く会場にくるようEメールで指示が出されたようだ。その対応の迅速さと柔軟性には感心した。広い会場なので普通なら緊張してしまうような場所であったが、チーム全員が慣れてきており、適当に笑いを取りながら予定通りのプレゼンとパフォーマンスをして、出席者全員のスタンディングオベーションで終了した。

ちなみに、この程度の大きさのクラブになると事務量も増えるので、事務員を雇い。(彼女の夫はロータリアン)当日の会計、受付けなどこなしていた、事務所は彼女の自宅ということらしい。



歓迎会 at Walburg German Biergarten

夜はWalburgというドイツ系のコミュニティにある屋外レストランにて歓迎会。各ホストや他のロータリアンと共に集まった。

テキサスはドイツやチェコからの移民が多く、地名にも多く残っている。このレストランもドイツ料理のメニューとテキサスのメニューの両方があった。せっかくなのでソーセージ、ザワークラウト、マッシュポテトのセットを頼んでみた。

私のホストはあまりドイツ系のものは好まないらしく、「ドイツの料理は量も少なくて嫌いだ」、と言っていたが、帰りには「思ったより良いレストランだった」、と食わず嫌いだった様子。

この会にはGSE受け入れ担当のKarenもAustinから駆け付けてくれた。NASAの時以来。久しぶりに会ったKarenからのニュースは、未着だった日本からの荷物はやはり行方不明のまま、なぜか伝票だけが届いた、というものだった。

アメリカで荷物が届かないというのは予想していなかったので当初は少々ショックだったが、テキサスでの滞在も残り一週間となっていたこの時には、すでに笑い話に。

Austin からここGeorgetownは車で20-30分程ということだが、わざわざこのために来てくれたKarenに感謝。



2010年5月15日（土）

Jim氏の事務所にて打ち合せ 午前

午前中Jim Albers氏の事務所で、帰国にあたっての手荷物や帰国後の報告書等について打ち合わせ



Schwertner Ranch & Cattle Operation視察 午後

車でSchwertnerへ移動し、途中のレストランで昼食。

午後からCapitol Land & Livestock社へ。

同社は1946年創業の私営の牛の集積所。テキサス各地にある牛の競り市で競り落とされた牛、年間約50万頭をすべて一度ここに集め、集めた牛を大きさや性別によって30種類ほどの規格に分け、さらに別の牧場に売却する中継地として機能している。

同社から牛を購入した牧場では、牛の規格が統一されているので、合理的に牛を育成して出荷することができるという利点がある。このような牛を集積させて規格を統一させるという業務を公的機関ではなく一民間企業が行っていることに驚かされる。



BBQパーティ

Georgetownに戻り、Jim and Debbie Albers氏宅でBBQパーティ。松永団員は蹄鉄投げにはまる。



2010年5月16日（日）

ホストファミリーと過ごす

- 佐藤団長
ミュージカル(コーラスライン)観劇
- 松永団員
ホストファミリーの親戚一同と会食
- 大本団員
原付バイクでツーリング、お土産の買い物
- 吉田団員
アムトラック乗車
- 端山団員
カヤック、お土産の買い物
- 品川団員
教会の日曜礼拝に出席(聖書の教えをライブバンドが歌にして演奏していた)、お土産の買い物

大本団員のホストファミリー宅でスイーツパーティ&余興

夕方からは、大本団員のホストファミリー宅でスイーツパーティー。スイーツを堪能した後、団長の詩吟、品

川団員の日本舞踊、チーム全員で「涙そうそう」を披露したのだが、テキサス人の歌心に火をつけてしまい、テキサスのスタンダードソングが目白押しの即席カラオケ大会と化してしまった。(端山団員が必死に音源と歌詞をネット上で探していた。) 尚、品川団員が踊っている時に、蛍が一匹飛んで来て、日本舞踊に彩りを添えたことを追記しておく。



2010年5月17日(月)

各自職業研修

- 佐藤団長
歯科医院訪問 2カ所
- 松永団員
PetSmart(全米最大規模のペットチェーン店)
George Town Farm Supply (農業関連商品販売店のペットコーナー)
The Feed Store (家畜用飼料販売店のペットコーナー)
Petland(ペットチェーン店)
Zoot Pet Hospital (動物病院兼ペットホテル)
PetSmart(ペットチェーン兼ペットホテル)
- 大本団員
South Western University (Dr. Carl at Professor of Language)
- 端山団員
テキサス州援助リハビリテーションサービス局
- 吉田団員
ジョージタウン市役所訪問 市長と面談
ジョージタウン商工会議所 訪問
- 品川団員
Fermata 社社長 Ted Eubanks 氏訪問
ジョージタウン観光コンベンションビューロー、ジョージタウン経済開発局訪問

2010年5月18日 (火)

Williamson County Courthouse

初めに Williamson County Courthouseを見学した。1911年に竣工した建物で、4年前に修復工事をして水道設備・エレベーターが同時に設置され、3年前から再度 裁判所として利用されている。

この裁判所で行われた有名な裁判は、1923年にK.K.K(Ku Klux Klan) の裁判で、初めて有罪判決が出た裁判である。裁判所の中には、黒人差別の時代に利用されていた設備(白人用、黒人用の蛇口)が残されていて、当時を思い起こさせるようなものだった。



Williamson County Museum

Williamson County Courthouseのすぐ向かい側にある Williamson County Museumを訪れた。

1911年に銀行として使われていた建物を修復して、2003年にオープンした博物館である。アメリカ先住民の時代について、カウボーイの服装の役割、Milem Countyの領域があまりに広いため、分割して Williamson Countyが作られたこと、K.K.K についての資料など、さまざまな展示があった。



Rotary Club of Georgetown.Suncity 例会出席

コンピュータのDELLの会社が開発した高齢者専用の住宅地にある総合ホールで例会が開催される。

この住宅地は55才以上の人のみ住める。土地と家を買った後は、管理費として月10万円程度支を払う義務

があるが、付属施設など無料で参加できる。地域内に3つのゴルフコースもあり、これは実費で支払うが、ゴルフカート(電気自動車)に乗って地域内では自由に乗り回すことができる。オースチンから車で20~30分の距離なので、人口は増えているようだ。

通常のプレゼンの前に今までの当地での、チームメンバーの面白いエピソードを端山団員が動画に編集して見せてくれたので、会場も笑いのある雰囲気の中かで始まった。

これで、昼食のみを除く12箇所のクラブ訪問のプレゼンを終えた。全員のチームワークでトラブルもなく、好評のうちに終了した事を団長として深く感謝している。



Equine Rehabilitation Center R.O.C.K (Ride On Center for Kids)

午後から 知的・身体障害をもつ子供や、退役兵士などが 馬に乗ることで、運動能力を発達・改善させるための施設、R.O.C.Kを訪れた。2000年に寄付による4頭の馬と、小さな小屋からこの活動が始まり、2006年に雨の日でも乗馬ができる現在の建物に転居した。

現在の利用者は 180人程度で、年齢層は2歳~84歳までと幅広い。スタッフは20名、馬数は20頭、毎週350人のボランティアが来てくれることで運営できている。

チャリティーパーティーを年に数回開くことで得る収益や、一般やスポンサー企業からの寄付、助成金などで運営費をまかなっている。



Inner Space Cavern(鍾乳洞)

Georgetown の主要な観光産業の一つになっている鍾乳洞Inner Space Cavern を訪問した。1963年に新しいフリーウェイを建設するため、テキサス・ハイウェイ建築課が地質調査をしていたときに発見した地下鍾

乳洞で、その後の調査で7000フィート(約2.1km)に及ぶ、大小さまざまな洞窟が有ることが分かっている。ツアーガイドに案内してもらい、洞窟内の珍しい形の鍾乳石やマンモスの化石を見ながら約1時間半のツアーを楽しんだ。



2010年5月19日 (水)

Fort Hood陸軍基地視察

レストランに集合し、そろって朝食。

車に乗ってFort Hood陸軍基地へ。Fort Hood陸軍基地は1942年に開設された世界最大規模の陸軍基地で、約5万人の将兵が駐屯し、イラクやアフガニスタンへ派兵する拠点となっている。

最初に基地説明があり、次に実際に訓練で使用する戦車のシミュレーションを体験する。砲撃や操縦もまるでゲームのようにできる限り単純化されている。

基地食堂で昼食後、戦地からの帰還兵のこころのリハビリ施設へ。帰還兵は120日間のケアが義務づけられている。施設はかなり宗教色が強い。最後に車窓から基地内の兵器を視察するもすでにイラクに相当数が送られているので数は少ない。

本日の視察を終えて、4週間にわたる今回のGSEのすべてのプログラムの日程を終了。



2010年5月20日（木）

Austin発

（ダラスで泊まることに）



2010年5月21日（木）

Dallas発

（ダラス発、日本到着）



3. 職業研修、ホームステイ報告

テキサス 5870 地区セントラルテキサス) 訪問 報告 (佐藤 俊一)

1. はじめに

まず、このプログラムに参加する機会を与えていただいた大谷透ガバナー、GSE 地区委員会、多くのロータリー関係者に厚く御礼申し上げます。

また、受け入れ地区の多くの人々のご好意で所期の目的が果たせたものと信じ、この貴重な経験を多くの方々に伝える事がこれからの課せられた任務とおもっております。

2. テキサスでの受け入れ状況

過去の受け入れ側の問題として訪問場所が現地についてからも決まっていなかったような事があったようにきているが、今回に関しては全くそういったトラブルがなく、かなり念入りに計画され、実行されていた。

広い地区を4つのエリアに分けそれぞれリーダーを決め(うち半分は女性)彼らがエリアの全てを仕切るようになっていた。サンアントニオでの合同地区大会では地区委員会が担当してくれた。日本の組織力も立派だが、テキサスも予想以上によく準備されていた。しかも柔軟性と連絡が密にされている。土地が広いぶん携帯電話が発達しており車の中でもかなり重要な決定がされていた。

例えば、同じ日に2箇所の例会訪問が予定されており、チームを半分に分けて訪問せざるを得ないことがあった。我々のプレゼンを見た地区ガバナーエレクトが6人でひとつのチームだから絶対分けるのはダメだと関係者に説得してくれてそのような状況が避けられたのは我々にとっても幸いであった。また彼の家にチーム全員が週末に滞在し、奥さん(ロータリアン)共々世話になった。



地区ガバナーエレクトの Rick & Teresa Price 夫妻

こちらではロータリーの過去の役職にこだわらず、本当に親身に世話してくれるロータリアンが多い。最後の週はパストガバナーが一度に大勢乗れるレンタカーを借りて、毎日自分で車を運転してずっと一緒に行動を共にしてくれた。すでに一線を引退しているとはいえ、それでもなかなかできるものではない。奉仕することが自分の喜びであると語ってくれたが、まさにロータリーの鏡をみたおもいである。また、彼は GSE 団長としてドイツへ行った経験があるので、あまりタイトなスケジュールは大変だと考慮してくれて後半の疲れのたまっている時期に少しゆとりのあるプログラムを組んでいただいたのもありがたかった。

訪問地はオースチン、サンアントニオのような大都市、ジョージタウンのような郊外住宅地、マヘイア、ヨークムのような田舎町などバラエティにとんだ土地にホームステイできたのもよい経験であった。

3. ホストファミリー

今回は6箇所の家庭に滞在する機会があった。

せっかく気心がわかる頃に、次が変わるのは残念だがいろんな家庭をみる事ができた。

団長という立場からカバナーや地区やクラブの役職にある人の家庭がほとんどであった。部屋はバストイレ付きの個室で、かつて娘さんの部屋であったとか一軒の独立した離れ屋にステイすることもあった。

朝食は食べない家庭が多いようで、私のためにわざわざ用意してくれるところもあった。ある家庭では一度も奥さんと一緒に朝食をしたことがなく、ご主人が朝食を準備してくれるケースもあった。夕食は外食やパーティが多かったが必要な時は奥さんの手料理であった。普通の夕食はシンプルで野菜サラダと一皿のメイン料理、最後の甘いデザートが定番である。

私にすればデザートはいらないから食前のビールにはおつまみなどほしいところであった。(ビールもジョッキでなく小瓶のラップのみでありこれも馴染めなかった)

どのエリアでも週に1,2度は持ち寄りのホームパーティを開いてくれて他のホストファミリーとも知り合う場があり、またいろんな家を訪問することができた。

総じて田舎の家は大きく、庭も広くそれ以外に広大なランチ(牧場)や個人のサファリを持っている家族もあった。その家に私が滞在した日に一頭の子牛が生まれたので記念にその牛に「トシ」という名前をつけてくれた。



子牛の「Toshi」

4、クラブ例会訪問

4週間の滞在で13カ所のクラブを訪問した。そのうちの11回は30~40分のプレゼンとパフォーマンスを行なった。チームワークのおかげでいずれのところも好意的反応であった。

昼例会では12時前くらいに会員が集まって自分で食事をとり、食べ終わった頃からはじまる。12時スタート1時終了がふつうである。ひとつだけ午後5時にパブに集まって6時に終わる(食事なし)ところがあった。

開会は国旗に向かい忠誠のこぼし?の後「4つのテスト」を唱和するところが多かった。

テキサスでは前述のようにさまざまな地域にあるクラブを訪問したので、大阪の都市クラブに比べてはるかに多様性と特長があった。例会場はすべてホテルでなく、教会の施設やレストランが多く、自前の例会場をもっているクラブもあった。したがって、年会費は高いところで12万円、安いところはその半分程度である。100名以下のクラブでは事務職員もいない。

また地区のカバナー事務所もない。そのせいかカバナーは奥さんもロータリアンが多く内助の功があるかもしれない。有能な奥さんを持つことがカバナーの資格かとおもったが、次年度は女性がカバナーなのでいずれにしても夫婦の協力が必要であろうと推測している。

5、合同地区大会

今回のGSEの目玉はなんといってもテキサス合同地区大会に参加しそこでプレゼンを行なうことであった。テキサス州は日本の国土の約2倍の広さに10の地区(District)がある。

今回はそのうちの6地区が集まって「TEJAS」Multi-District Conferenceが開催された。

かつて大阪で関西4地区が集まって合同地区大会を開催したことがあるが、テキサスでも前例がなく初めての試みであるとの事。その時期に合わせて各6地区に7つのGSEチームが各国から来ており、本会議の

オープニングセレモニーでの紹介の後、昼食をはさんで各チーム30分与えられた時間でプレゼンを行なった。

GSE チームは、インド(2チーム)、アフリカ(マラウィ・モザンビーク・ザンビア・ジンバブウェ)、ブラジル、タイ、フィリピン、日本の合計7チームでそれぞれが自分達の地区を紹介した。我々も女性は着物、団長は浴衣の姿で気合を入れてプレゼンに臨んだ。他チームに比べてもプレゼン内容はまとまりがあり、団長の詩吟、全員の阿波踊り、品川さんの日本舞踊のパフォーマンスも好評であったようだ。

ランチプログラムでは知り合い同士が固まらないようにペアーで分かれて別の席に着くシステムになっており、他人との親睦を深めるよい方法だとおもった。

食後のスピーチは James P. Owen 氏の「Cowboy Ethics」という話で、いかにもテキサス人に似合いそうな内容であった。なお、大会期間中は国際大会のように各分科会に分かれていろんなテーマで話し合いが行なわれていた。



各国からの GSE チームメンバー

6、一般研修、職業研修

一般研修については他のメンバーが分担しているので割愛する。

職業研修についてひとこと。

「歯科医」という職業は世界的に共通なので、「Dentist」の一言で仕事の説明を詳しくする必要がないのが便利といえ便利である。

そのせいか受け入れ側からすればその診療内容レベルなど関係なく、知り合いの歯科医院を4軒紹介してくれた。うち1軒は子供専門医と補綴専門医(義歯・ブリッジなど)、他の2軒は一般開業医である。アメリカは専門医制度が発達しているので患者さんは状況によって何軒かの専門医院に通わなければならない、しかも治療費は健康保険がないので、全て実費で支払う。日本ではアメリカの専門医の行なう高レベルの治療も一般の開業医が行い、一方では受診者は保険治療内で必要最少限度の処置を受けられ、しかも自分で気に入った歯科医院を選べる自由もあるから私にいわせれば患者さんにとっては恵まれた医療環境にあるといえる。勿論、日本の医療制度も問題はあろうとおもうが、より高度のケアを求めるならば自己負担がより増えることをよしとしなければならないであろう。

結論をいえば、4軒の歯科医院を一通り見学した限りでは特別驚くような器械設備や材料も置いていないので、日本のレベルがやっとなアメリカに追いついたと確認できた職業研修であった。



7、まとめ

出発前は自分の体力や英語力にやや不安をもっていたが、まさに現地ではその通りであった。幸い睡眠不足以外は病気になることもなく、受け入れ側の暖かい心使いと団員のチームワークのおかげで職務を全うできたことを感謝している。

果たして団長としてチームの指導力を発揮できたかどうかは疑問だが、若い人々と4週間行動を共にし、楽しんで過ごせたのはよい経験であった。

一般研修で一番印象に残っているのはヒューストン郊外の NASA と Fort Hood 軍事基地の見学であった。

NASA では宇宙飛行士であり元国際親善奨学生の方山崎直子さんには会えなかったが、現地ロータリーの紹介のおかげで普通の見学者ではいけないところまで案内してもらった。NASA の過去 50 年近く歴史の中、世界中の注目を集めてきた施設をめぐりながら科学技術の進歩と国際情勢の変化にいまさらながら感慨を覚えた。

「こちらヒューストン！」という同時通訳の声を聴きながら、人類初めての月への第一歩。

吹田万国での宇宙船や月の石を見るために何時間も列に並んだ思い出。チャンレンジャーでの大事故。アポロ 13 号の映画での緊迫した地球帰還ドラマなど個人的な思い出もすべてがこの場所から発せられていたのだと感無量であった。

最初は冷戦時代の軍事目的であったものが、いまでは見学中にロシア人らしき人達とすれ違ったように平和目的の国際協力が進められているのは望ましいことである。しかし時代と共にこの役割も一段落するようで、この施設の雰囲気になぜか閉店間際のレストランを思わせたのは思い過ごしか。



アポロ計画時代のミッションコントロールセンター

その後、Fort Hood という巨大な軍事基地を見学する機会があった。

昨秋ここで乱射事件があり、13人の死亡と多数の負傷者が出たことで有名になったところである。乱射原因ははっきりしないが犯人は精神科の医者で戦場に派遣されるのをおそれての発砲事件といわれているが、本来ならばそのような兵士のための相談相手になる医者が事件を起こしたのは皮肉なことである。

我々が見学した施設の一部に戦場から帰還した兵士を日常生活に戻すためのいろんな訓練所があった。心身共に傷ついた兵士には癒しの場が必要ということで安らぎや、癒しの場もあり、その部屋には数々のリーフレット、創価学会のパンフまで置かれていた。また日本庭園も癒しの空間として庭につくられていた。まさにいたれりつくせりの施設であるが、「人を殺す」よう訓練された兵士がその心の傷を回復し、日常生活に戻るためには多くの苦難が待ち受けているのであろう。その基地から多くの戦車や輸送車などがイラクやアフガンに運ばれているのでいまは数は少ないといっていたが、それでもいろんな戦闘のための車両をバスから垣間見ることができた。



戦闘車両の駐車場

これだけの大物量とハイテックのある軍事力を持ってしてもいまだ戦場では勝利を収めていないということは力だけではすべてを解決することはできないのではないかと疑問がわいてくる。ベトナム戦争での教訓を忘れていないのかと簡単に批判することはできても、アメリカ人は現実に戦地で戦い、テロの犠牲者になって血を流しているのもまた事実である。沖縄基地の問題も含めて論評するには重いテーマである。

我々と同行したロータリアンの中にもあからさまでなくても今のアメリカの状況に批判的というか冷静に見ている人もいることが感じられた。国際ロータリーの最終的な目的も戦争のない平和な社会を旨としており、ロータリー財団の「平和フェロー」、人道的補助金制度など関連したプログラムを展開しているが、いつの日かこの巨大な軍事基地が必要となくなる日が来ることを願わずにはおれない。

テキサス GSE 報告書 (松永 圭司)

はじめに

「テ、テキサス～！？」これは私の勤務するペットのドギーマンハヤシ株式会社の会長であり、八尾中央RC所属の林より、GSE 派遣団員に応募するように言われた時の第一声でした。

私にとってテキサスとは、お恥しい限りですが、プロレスラーのスタンハンセン、ミュージシャンのステイビー・レイヴォーン、NASA、カウボーイなど限られたイメージしかなかったため、そのような場所で一体何を体験するのだろうかという気持ちが現れたのが、この第一声だったのです。

今までに長期留学経験や、多くの海外業務渡航経験がありましたが、今回実際に GSE プログラム参加の機会を頂きまして、正直なところ、過去にこれ程まで充実した海外での時間を過ごしたことはありませんでした。関係各位には、私の抱いている謝意をどのようにお伝えして良いのかわかりませんが、私の体験したことを少しでも多く、正確に伝えることが出来れば、それに代わるのではないかと考えております。

ロータリークラブ例会参加、プレゼンテーションについて



はじめてのロータリー例会場にて

GSE プログラムの中で重要な役割の1つが「例会に参加し、プレゼンテーションを行うこと」です。GSE 委員会や、アルムニ会、英語の先生のご意見を参考に、チームメンバーで意見調整をしながら、何度も修正を重ねて完成させたプレゼンテーションで、その出来栄えには皆が満足していたものの、テキサスでの例会で初めて披露した時には流石に緊張しました。佐藤団長をはじめ、メンバーの誰1人として、こんなに大勢のアメリカ人の前で、英語でスピーチした経験など無かったからです。しかしながら、いざプレゼンが始まると皆真剣に聞き入ってくれて、時には笑いも起こり、暖かくほのぼのとした雰囲気の中で遣り遂げることが出来ました。個人的には、プレゼンは興味を持って聞いてもらってなんぼという姿勢で挑んでおりました。私はドギーマンという社名が、欧米の人には若干滑稽に聞こえるのを海外出張経験より心得ており、そこを逆手に取って笑いに変えたり、日米の犬のランキングを入れておいて、皆さんに面白可笑しく紹介して1位を当ててもらったり、野球の話題の時には、好きなチームを聞いたりして、一方通行ではなく、参加してもらったり、笑ってもらうことによってプレゼンにメリハリをつけるように心掛けました。(お陰様でドギーマンの名前は多くの人々の脳裏に刻まれることとなり、願ったり叶ったりです。)

我々の GSE チームの凄いところはここからです。プレゼンを終えた後、佐藤団長の詩吟、チーム全員による阿波踊り、チームメンバー品川さんによる日本舞踊による怒涛の「パフォーマンスタイム」を繰り広げました。恐らく初めて聴いたであろう佐藤団長の詩吟に皆圧倒され、阿波踊りでは、私が率先して聴衆の中に

踊り込み、聴衆の笑いを誘い、最後に品川さんの日本舞踊「さくらさくら」できっちりと締め括った時には、聴衆はスタンディングオベーションで応えてくれ、これは大きな自信となりました。

プレゼン + パフォーマンスをフルで行う場合、約 40～45 分掛かるのですが、最初のプレゼンをフルで終えた後も、ほとんどのクラブで時間を融通してくれて、中座することも無く真剣に聞き入ってくれ、終わった後には賛辞を惜しまないというテキサスのロータリアンの礼儀正しさ、優しさ、温かさには、こちらが逆に拍手したくらい感激しました。

プレゼンの内容は聴衆の反応を見ながら、回を重ねる毎に改善されていき、最後のプレゼンでは、テキサスで体験したことの画像や映像を端山さんに作成して頂き、冒頭に流してテキサスの皆さんのサポートに感謝の意を表しました。(もちろん、その映像も大好評であったことは言うまでもありません) プレゼン&パフォーマンスを通じて、テキサスの皆さんに、2660 地区、大阪、日本文化について、理解を深めて頂いたことと自負しております。ここで未来のGSEチームの皆様へ一言、「プレゼンは生き物である」(笑)

ホストファミリーとテキサス事情



オースティン地区のホストファミリーによる熱烈空港お出迎え

前述の通り、テキサス人は概して親切であるという印象を受けました。それは都会の雑踏に暮らす私にとって、テキサスの広大な台地が彼らに齎すものと思われ、非常に居心地が良いと感じました。

1 組目のホストファミリーは Austin の Ben & Nancy Lehmann Carsow 夫妻で、2人共、教職に就いていたものの、Ben はリタイア、Nancy はパートタイムでセミタイアですが、2人共アクティブで今は小休止といったところです。犬を3匹、猫を1匹飼っており、後述の職業研修の際にも尽力してくれました。テキサスではペットの多頭飼いは至極一般的で、又、ペット所有世帯数は、チームメンバーのホストファミリーの統計を取ってみても、80%は優に超えていました。

Austin 市は、“Live Music Capital of The World(ライブミュージックの首都)”と銘打った観光政策を執っており、“Austin City Limits Music Show”、“South by Southwest” などの大規模なライブショーで、世界中から観光客が集まって来ます。Ben & Nancy も例に違わず音楽好きで、Ben にライブに連れて行ってもらった

り、お土産にと CD を頂いたり、音楽好きの私には堪らないファミリーでした。



Ben に連れて行ってもらった、来日経験もあるテキサスアーティストのライブ

2 組目は、San Antonio 地区大会参加のため、たった2泊でしたが Richard& Ruth Haas 夫妻にお世話になりました。地区大会の時くらいはホテル滞在でも良いのではと思ったが、ここでもロータリアンの協力が得られ、予定には無かった職業研修を入れてくれたことには、このプログラムの柔軟性を感じました。

3 組目は、Mexia の John & Kathleen Stubbs 夫妻。親の代から葬儀屋を営んでいて、John が葬儀全般、Kathleen が墓石を担当しています。テキサスではまだまだ伝統的な土葬が多いようですが、大都市では、土葬と火葬の比率が入れ替わっているところも数多くあるようです。Mexia には、Cindy Walker という、全米トップ 10 の楽曲を何曲も排出したカントリー系の作曲家がいたのですが、その人のギター型(!)墓石も手掛けました。職業研修では無かったのですが、John が、夜に葬儀施設(セレモニー会場)を見せてくれて、棺桶のショールームで様々な棺桶を見せてくれた時には、「仏壇を選ぶ感覚なんか？」と自分が理解出来る範疇で理解しようと試みたりしました。Kathleen は知る人ぞ知る "Camel(ラクダ)マニア" で、家中、ラクダグッズだらけなのですが、こちらは…自分の理解の範疇を遥かに超えておりました(苦笑)。GSE メンバーの受け入れは初めてだったようで最初はギクシャクしましたが、年齢も比較的近いこともあり、最後にはお互い打ち解けて話せるようになりました。



通称“Camel House (ラクダの館)”

4組目は Rick & Teresa Price 夫妻で、Mexico での週末をご夫妻の邸宅で、チーム全体で過ごして前半の反省と、後半の打ち合わせが出来たことは、プログラムの折り返し地点で確実にリフレッシュ効果がありました。又、Yoakum での例会で、チームが2つに別れて、プレゼンを行うという日が設定されていて、我々のプレゼンを見て、本当に心から感激してくれた夫妻は、「絶対にチームは1つであるべき」と力説し、チームが分かれずに済むように尽力してくれました。常にチームのことを最優先に考えてくれたご夫妻でした。

5組目は Yoakum の Jim & Louise Witte 夫妻で、Jim は 1978 年から月1回、ロータリークラブ主催で、ボランティアのミュージシャンによるチャリティーカントリーミュージックショーをずっと開催し続けており、ロータリークラブの活動としての地域への密着度、貢献度の高さを感じました。そのカントリーミュージックは、やはりテキサスのある世代以上の人々にとっては、欠かすことの出来ない日常必需品のような存在だと思いました。

テキサスと言えば、カウボーイというステレオタイプがありますが、もちろんメンバーの中には、カウボーイのホストファミリーの人も居ました。カウボーイじゃない人も、カウボーイハットをかぶって、牛の代わりに馬鹿でかいピックアップトラックを駆る人が大勢います。何でも全米のピックアップトラックの約 1/4 がテキサス州で登録されているそうです。日本人の感覚ではピックアップトラックでは非合理的で、どうしても万能タイプのミニバンとなってしまいますが、テキサスの人はピックアップトラックを1つのステータスと捉えているようです(笑)



テキサス人のステータス、ピックアップトラック

6組目は、Ron & Barbara Garland 夫妻で、夫婦のどちらかが、55歳以上でないと入居出来ない“Sun City”という高齢者居住地域でのホームステイでした。Sun Cityのような高齢者居住地域は全米各地にあるようで、高齢者が楽しく余生を送れるような様々な施設を擁した広大な居住地域は、高齢化社会を迎えつつある日本にこそ必要なものであるが、残念ながら限られた土地しかない日本では先ず実現不可能なプロジェクトだと思われます。

今回、私を受け入れてくれたホストファミリーは、皆個性があって違っていたのですが、共通することがありました。それは奉仕の心と、思い遣りです。ロータリアンとしての彼らの姿勢ももちろんですが、書面での契約よりも人との握手を信じるという、テキサス人氣質、常に人の気持ちを思いやる姿勢に、私は強く尊敬の念を覚えました。

職業研修について

日米の犬のランキングをプレゼンで紹介したことは前述しましたが、アメリカでのラブラドルレトリバー人気は絶大で、ほとんどの例会にて1位は何？と尋ねると「ラブ〜！」と正しい答えが返って来ました。しかしながら、これはあくまでも“純血種”の話で、実際は“混血種”や、“雑種”が圧倒的に多いです。その辺のアメリカのペット事情を、私の職業研修に絡めて説明させていただきます。

The Groovy Dog (A Bakery for Dogs) 視察

小売店兼犬用ベーカリー(ビスケット)の製造・販売を行っている会社で、90年代に創設され、現在のオーナー(Ms. Kim)がフランチャイズ制度でビジネスに参加し、その後、前オーナーから会社を譲り受けたという経緯のお店です。以前はテキサス州に3店舗のチェーン展開をしていましたが、オーナーの意向が行き届かないという理由で、現在は、2店舗を閉鎖し1店舗のみで、オースティン近郊での販売を行っています。従業員はパートが1名。店は表側が店舗になっており、レジを挟んだ裏側に、小規模ながらビスケット製造用のミキサー、成型機、オーブン、乾燥庫を備えていました。これらの製造設備にてペット食品を製造するには、USDA(米国農務省)の許可が要るようです。ビスケット(Ms. Kimはベーカリーと呼んでいる)は、水分値が低く日持ちがかなりするものに仕上げられています。ペットショップと言うよりは、ベーカリーという名の通り、製造～直売という人間のパン屋さんに近いコンセプトを有するお店です。フレーバーも日本ではまず見つけられないであろう“ピーナッツバター味”、テキサスらしい“バーベキュー味”、他にも“シナモン味”、“ベジタブル味”などがラインナップされていました。“商品コンセプトは人間用に使用されるグレードのものを使用し、ペットの害にならないような原材料を使用する”というもので、愛犬の健康を第一に考えるドギーマンのコンセプトと重なるところが多々あり、好感が持てました。実際にお客様が犬と来店された際、犬の名前を覚えていて、お客様と親しく話されている姿は、対面販売を最重要視する日本のペット専門店に通じるも

のがありました。他に犬用冷凍肉などの販売も行っており、このような商品は日本には流通していないため、興味は抱いたものの、実際に日本のペットマーケットに流通させることは難しいだろうと感じました。



The Groovy Dog オーナーと

Tractor Supply Co. 視察

1938年創立の全米44州に900店舗を展開するチェーン店です。会社名からも分かる通り、トラクターの販売や、農業関連商品、ガーデニング商品などを販売していますが、ペットコーナーが非常に充実しておりまして、日本でホームセンターのペットコーナーが充実している雰囲気には似ていました。アメリカの場合、車社会のため、ドライフード(主食)の売れ線は圧倒的に大袋が多いです。中にはバッファロー肉が原料のドライフードというものもあり、お国柄を感じました。話は少し反れますが、ハンティング用の鹿用フードなどというものが売られておりまして、角を大きく育てるのに特化したものなどもあり、日本にはない独自の文化に驚きを覚えました。

George Town Farm Supply 視察

農場関連の商品をメインに扱う小売店です。オーナーの情報によると“Orijen”という商品がThe Glycemic Research InstituteのPet Food of The Year 2009-2010に選ばれたとのことで薦めておられました。売りとしては、1. オーガニックであること。2. 肉類を75%使っていること。3. 穀類を使用していないことを挙げており、裏面には日本語も含む6ヶ国語の原材料表記がされていました。ただし少し割高感があるので、ベストではあるがベストセラーではないと説明されていました。最近の傾向はやはり、より自然志向、ナチュラル志向にあるようで、日本のペット市場でも、その傾向が徐々に強まっており、人間の残飯を与えていた頃より格段に、ペットオーナーの意識が高まって来ている表れだと思います。それに伴い、犬猫の平均寿命も格段に延びて来っており、ペットビジネスに携わる私としては、非常に嬉しく、更に推進すべき傾向だと言えます。



Georgetown Farm Supply

The Feed Store 視察

この店は馬や牛用の飼料を主に販売している店で、ペットフードも置いていたが、この店も“Muenster Natural Dog Food”という天然保存料を使用しているドッグフードを推していました。獣医師チャンネルでしか販売出来なかった、蚤取り首輪、フロントラインが3～4年前から一般販売されるようになったとのことで、その理由を尋ねてみると、製造メーカーが政府への働きかけたことにより、実現したとのことでした。

Petland 視察

日本や台湾にもチェーン展開するペット専門店で、アメリカではめずらしく生体も販売していました。AKC(American Kennel Club)チャンピオンの血統の犬を販売しており、中には4,000ドルを超える犬も！日曜版の新聞の純血種の販売欄で、価格をチェックしてみました。犬種にもよりますが、大体2～600ドルあたりで販売されているものが多かったです。

Zoot Pet Hospital 視察

オーナーを待つ間に手に、たまたま手にしたオースティン地方のフリーペット雑誌に、ドギーマンの上海工場が製造する犬用知育玩具“IQ Step Ball”が掲載されており、日本から遥か遠いテキサスので自社製品の紹介記事に巡り合うことが出来、1人灌漑に耽っておりました。因みに私の所属する国際部第1グループでは、アジアを筆頭にヨーロッパ諸国にも商品を輸出しておりますが、ペットの先進国であるアメリカ市場では苦戦を強いられており、今後、この職業研修の経験を活かして、アメリカ市場に拡販していくことが課題と考えております。Zoot Pet Hospitalは2008年創立。4人の獣医師(うち2人はパートタイム)が勤務しており、病院、ペットホテル、美容院、トレーニング施設が併設されています。建物が全く病院らしくなくとても立派で、訪れた人たちからの評価も好評のようでした。大きな病院へのレントゲンデータのオンライン送信や、インターネットでのペットホテル室内の確認など、最新の設備を完備しています。ホテル料金は1泊\$46、スイートで1泊\$67とやや高めですが、かなり広めの部屋の裏には運動スペースもあり、更に建物の裏には複数のドッグランもあり、安心して預けられる雰囲気構築に成功していました。アメリカでのペットホテルの運営には、特別な免許は必要ないとのことでした。売上げは、60%が病院、30%がホテル、10%がグルーミング、トレーニングなどという構成比とのことで、経営バランスも良好のようでした。



Zoot の看板。獣医、ホテル、グルーミング、デイケアと書かれている。

PetSmart 視察

アリゾナ州フェニックスに本部を置く全米屈指のペット専門小売チェーン店です。創立は1986年。小売店のみの店舗と、ペットホテル併設店舗があり、ペッツマートが戦略地域と判断した地域にのみ展開しているとのことです。驚いたのが、ペットホテル内はほとんど悪臭がしなかったことで、その理由を尋ねると化学薬品を用いた清掃を1日3回掃除行い、週に1度は排水設備も化学薬品を用いて清掃するとのことで衛生面には細心の注意を払っている印象でした。預かった犬の取り扱い方については、専用カルテにて管理しており、カルテをケージの前に吊り下げて、食事や運動について取り違えのないようにしています。ホテル料金は一泊 US\$27(スイートは1泊 US\$37)食事込みの料金ですが、持ち込みも可能です。基本年中無休。犬用の部屋が最大157室、猫用の部屋が16室と非常に規模が大きいです。前述のZootのホテル設備に比べると日本のペットホテルに近い印象ですが、規模的にはここまで大きいものは無いですし、衛生面でも見習うべきところが多々ありました。

ペッツマートでは、ペットの販売はおこなっていません。その代わりに、捨て犬、捨て猫の里親探しを支援する“Adoption Center”という組織を有しています。この組織は、各地方のペット救済団体に里親探しのための場所を提供するという活動を行っており、又、その団体の運営に必要なペットフードや、ペット用品も提供しています。更に里親が見つかった場合、新しいペットオーナーに、基本的な飼育方法の書かれた小冊子を渡すことにより、捨て犬、捨て猫の再発の防止、ペットオーナーの意識向上、教育にも注力すると同時に、顧客の開拓も行うという素晴らしいケアの方法を採っています。

2009年末現在、この組織は、約400万頭以上の里親探しに貢献しました。前述の“混血種”や“雑種”が多い理由が分かりましたでしょうか。そうです。レスキュードッグ&キャットを飼うことは、アメリカの人々にとって純血種を飼うこと以上に一般的なペットの入手方法なのです。ペットの販売をせず、純粋に里親探しに尽力しているペッツマートの慈善的な姿勢には、日本のペット市場が見習うべき理想の姿の一つであると考えます。

他にもペッツマートは、“PetSmart Charities”という非営利団体も有しており、里親探しの場所を提供していないペット救済団体にも寄付を行っています。寄付金は通常、各店舗の募金箱により集められる他、買い物客が望めば、クレジットカードやデビットカードでの決済時にも寄付することが出来ます。これらのチャリティイベントによる寄付金は、3,400以上のペット救済団体に提供されています。



全米最大手のペットチェーン、PetSmart

不況にもかかわらず、日本では未だペット人気は衰えを知りません。それは少子化、核家族化、高齢化社会が進んだからかもしれませんし、時代のスピードが年々速くなっていくことに、人々が癒しを求めているからかもしれません。確かにペットは、子供の情操教育にも最適です。現代社会において、癒しのパートナー的な役割も担っています。医療面においてもアニマルセラピーの重要性が高まっています。高齢者の伴侶動物(コンパニオンアニマル)として、もはや家族の一員と呼べる存在になっています。このように、ペットとの共存が人々にもたらす恩恵は図りしれません。



ホストファミリーの愛犬とさよならの挨拶

その一方でとても悲しいことですが、心無いオーナーにより捨てられたり、虐待を受けたりしているペットが居ることも事実です。日本では動物愛護法や、昨年施行されたばかりのペットフード安全法等の法律で、ペットの権利は一応保護されていますが、前述の捨て犬、捨て猫の救済の方法や、全国の各自治体の処分、救済の手段など、現実はまだまだ欧米に遠く及びません。

ペットビジネスに携わる業界人として、単に自社ブランドの商品を拡販するだけではなく、今回テキサスで学んだことを活かして、人とペットが楽しく共存していけるような環境づくりに、少しでも貢献して行ければと思います。温かいロータリアン達によって、愛情を持って育てられていたレスキュードッグ&キャットたちの純粋で、温かい瞳の輝きは一生忘れることはないでしょうし、将来、それが私の動機となり続けることでしょう。(そして...庭でスカンクにスプレーされてしまった某ワンちゃんの臭いも、シャンプーしたにも拘らず、強烈な臭い...じゃなく記憶として残るでしょう。)



生涯の友人となった団長、GSE メンバーと。

おわりに

この報告書を書きながら、濃密な4週間を振り返りました。“後悔先に立たず”と言いますが、こんなに素晴らしい体験が出来るならもっと準備万端整えれば良かったとか、団長やメンバーに迷惑ばかり掛けたなとか、ドクターペッパーをもっと飲めば良かったとか、某ワンちゃんをスカンクから守ってやれなかったなとか...今は猛省に浸っております。同時に、自分出来ることは自分の出来る範囲でやれたかなという充実感、達成感のようなものも感じています。それはしかし、関係各位のご尽力、ご協力、ホスピタリティーなくしては、何一つ感じる事が出来なかったことで、未だ適切な感謝の言葉は見つかりません。最後に、私の第一声を撤回させて頂いてよろしいでしょうか。皆様に支えられて、誰1人体調を崩すことなく、大きなトラブルも無く、他では絶対に体験出来ない日々を送り、人間としても成長して無事帰国した今なら、こう言います「テキサス！！」第一声と同じ？疑問符が感謝感激の感嘆符に変わって、伸ばすところも違ってきますよ(笑) 愛犬のソラが横でうるさいのでこの辺で。

テキサス GSE 報告書 (吉田 章夫)

1. はじめに

GSE 派遣団員としてアメリカテキサス州に派遣されることになりましたが、私にとって、海外旅行を除いて海外での滞在は初めてのことであり、しかも現地ではこれも初めてのホームステイとのことで、出発は期待と不安の入り混じったものになりました。最初の訪問地 Austin のホスト宅は、近郊の Pflugerville にある David & Jane Clay 夫妻宅でした。到着した空港で、意外にも David は緊張した面持ちの私に片言の日本語で話しかけてくれました。David は空軍の退役軍人で、50 年ほど前に青森県の三沢で暮らし、高校で日本人に英語を教えていたとのことから、日本語の単語をわずかに記憶していたのです。久しぶりの日本人だったので日本語を使ってみたと言っていました。語学に多少の不安もあった私にとって、最初のホストが David だったことはどれだけ幸運なことだったかわかりません。

その日から長いようでいて、あっという間の4週間の GSE プログラムがスタートしました。

2. 職業研修等を通じて

私は、職業研修では主に市役所や商工会議所等を訪問し、また、ホストとの会話等を通じて、テキサスの経済・産業、行政・地域、観光などについて考察しました。

(1) 経済・産業について

派遣される前、私は、テキサスを含むアメリカ全体がサブプライムに端を発した金融危機の影響等で不況なのではないかと考えていました。しかし、実際に訪問したところ、予想に反してテキサスは好景気あることに気がつきました。そこで、なぜ私の予想が外れたのか、滞在中その理由について考えてみました。

テキサスはかつて、石油採掘や農業牧畜等の第一次産業とそれに伴うケミカル産業や皮革加工産業などが主要産業でしたが、およそ30年ほど前に、テキサスは州の政策として、当時のマニュファクチャー（製造業）を発展させたハイテク産業の振興を図りました。当時アメリカは、70年代のベトナム戦争終結、ニクソンショック、オイルショック、80年代の日独の製造業の台頭などから、アメリカ衰退の兆しが見え始めていました。そこで、全米各州で産業改革がおこり、例えばカリフォルニアはサービス産業、観光産業、バイオや IT などの新産業に転換し、シカゴ、ニューヨークなどは金融産業へ転換するなど、各州が州法などで規制緩和をしたり、税制優遇をしたりして、生産性の低い従来の製造業からの脱却を目指す動きが出てきました。その中で、テキサス州はあえて製造業を選択しました。その理由は、①資源（石油）が豊富であること、②軍基地が集積していること、③テキサス大学などの大きな大学が存在していることが挙げられます。テキサスの製造業は、安い資源を活用し、大学との連携をしながら、州が斡旋する軍や NASA からの仕事を受注し、テキサスは、高い技術産業、特に航空産業やコンピュータ産業の集積に成功しました。具体的には、州はカリフォルニアからの企業の移転、呼び込みで成功したのです。しかしこの点、州の採った政策は決して大きなものではありません。州は税金（所得税及び法人税）を安く設定し、軍や NASA からの仕事の斡旋などを行いました。しかし、それ以上に重要なことは、テキサス州は全米各州で産業改革の必要性が叫ばれたとき、サービス産業や金融産業への転換を図るのではなく、従来の製造業をベースとしたハイテク産業を集積させることを選択したことです。テキサス州は、資源が豊富で地価が安く、また大学の存在や軍基地の集積などの州の状況を冷静に分析したうえで製造業を集積させるという判断をし、その手段として近隣のカリフォルニアから企業を呼び込む戦略を立てたのです。一方でカリフォルニアは、70年代からのシリコンバレーなどの成功があったものの、そこからの発展に失敗し、産業を流出させています。また、民主党 (Democratic Party) が強いことから、高福祉を維持するため税金が高く、政治的に核開発も禁止し、また、高福祉であることから貧民・移民の流入を招き、財政を圧迫させています。このように、行政の判断による成功と失敗事例を考察することができたことは、非常に興味深いものでした。

しかし、テキサスは正しい判断から非常に成功したように見えますが、それ以上に幸運だったことも間違いありません。テキサスは、まず、資源が豊富で軍や大学の集積があり、土地が広いことから地価も物価も安く、移転を考える企業にとって魅力があります。次に、共和党 (Republican Party) が強いことから税金も安く、低福祉なので行政に負担となる貧民・移民の流入がそれほど多くありません（流入はあるが労働もする）。最近大統領が2人も出ています。また、住民の消費意欲が高く内需が大きい。そして最大の幸運は、近隣国に製造業の競争相手がいないことです。具体的にはアメリカ近隣には中国のような国がないということです。アメリカでは中国は地球の裏側の遠い国という認識でした。実際、テキサス滞在中も雑貨などを除いて中国製品をそれほど多く見かけることはありませんでした。あるホストとスーツの話をした時、テキサスでは中国

製のスーツや服を見かけないということを知り、大変驚きました。信じられないことから、わざわざクローゼットに案内してもらって自分でも確かめさせてもらいましたが、クローゼットの中の服のおよそ3割が国産(アメリカ製)、3割がメキシコ製、2割が(なぜか)インドネシア製、残りがペルーやハイチ製などで、確かに中国製はほとんどありませんでした。

このようにテキサスは、州の政策やその他の条件が良かったことから、全体的な景気は悪くありません。しかし、州内の各市ではそれぞれの市の産業振興の結果によって活気の有無がありました。例えば3番目の訪問地 Mexia は、人口 6,500 人程度の小さい街ですが活気がありました。しかし、その隣町の Groesbeck は Limestone 郡の郡庁所在地にもかかわらず活気がありませんでした。その差は産業振興の成否です。Mexia は、産業振興のために、交渉のスキルのあるプロの交渉人を経済振興局長とし、市役所や商工会議所と毎週定期的に議論して、投資の見極めや絞り込みをした上で交渉を進め、工場等の誘致に成功してきました。一方 Groesbeck はそれを怠ったためかつての活気が失われました。アメリカでは、産業振興の結果によって、つまり競争による成長の成果によって街の活気に明らかな差があるということに驚きました。そして、産業振興の結果は交渉のスキルを持つ人材に大きくかかっており、役所外からの人材登用の重要性、必要性が分かりました。

(2) 行政・地域について

テキサス州では、州が率先して「Don't mess with Texas」の取り組みを 1986 年から行っています。これは「テキサスをきれいにしよう」という意味のスローガンで、その取り組みの一環として日本のアドプトロード(道路や公園などで範囲を定めて誰かが責任を持って清掃等の管理を行う)のような取り組みも行っています。しかし、「きれいにしよう」という州のキャンペーンだけで取り組みが進むとは、通常は思われません。進めば苦勞はしません。しかし、テキサスでは日本とは比較にならないほど公共スペースが整備されています。そして意外なほど治安も良いです。それは、テキサスでは、住民が基本的に自分たちで自分たちの街をきれいにし、治安も守るというコンセンサスを持っているからです。

治安については1つエピソードがあります。最初の訪問地のホスト宅のそばに大変美しいトレイル(散歩道)があり、滞在中は毎朝20分程度散歩をしていました。ある日、私がホスト宅に散歩から戻ったとき、家の前でホスト宅の写真を写していました。家に戻るとまもなくホストの携帯電話が鳴りました。電話は出勤途中の近所の人からであり、「先ほど家の前を車で通りかかったとき、見知らぬ東洋人が家の写真を撮っていた。用心した方がいい。」とのことでした。ホストは笑いながら、「それならうちにホームステイしている日本人だ。大丈夫。今度紹介するよ。」と話していました。要するに私は近所の人から不審者として通報されていたのです。しかし、私が驚いたのは通報されたことではなく、普通の住宅街にもかかわらず、近所の人同士が不審なことや危険なことなど、気がついたことを伝え合っている地域のコミュニティがあるということでした。このようなコミュニティがあるからこそ、街の治安の維持も公共スペースの管理も自分たちで行えるのです。その結果、治安や管理にかかる行政コストは少なく済みます。

なぜこれほどまでに地域コミュニティが強いのかについて、職業研修で Austin 市郊外の Pflugerville 市の市長から話を聴くことができました。私は、市長に市の施策で最も重要な施策、これから力を入れていきたい施策は何かと問いかけてみました。そのとき私は、福祉の充実や産業の振興などの答えが返ってくるものと考えていました。しかし、市長の答えは、「それは地域コミュニティの強化だ。そしてそのためには国や州や地域に誇りを持たせる教育が最も大切だ。」というものでした。アメリカは個人主義の国と言うイメージがあります。しかしそれは決して自分さえよければよいという、バラバラの個人主義ではありません。強烈な愛国心愛州心を持つ個人主義です。アメリカ人は、このような個人主義を通じて、他人や行政に頼らない個人としての自立、向上心を持つとともに、国、州、地域などに対する帰属意識も併せ持ち、個人と地域を自分たちの責任で管理するという意識もっています。その結果、地域コミュニティが非常に発達しているのだと考えられます。そしてその鍵になるのが自分たちの国や地域に誇りを持たせる教育です。それは学校教育だけではなく、国や州の象徴である国旗や州旗がどこでも常に目に入り、また、公共施設である歴史博物館等でもイデオロギーの強い展示内容にするなど、徹底して行われていることがとても印象的でした。

(3) 観光について

合同地区大会が開催された San Antonio 市は、アラモの砦やリバーウォークなどの観光スポットを有し、年間 1,000 万人以上が訪れる観光都市としても有名です。私たちは幸運にも、San Antonio 滞在中にこれらの観光スポットを回る機会がありました。

リバーウォークは、乗船時間がおよそ1時間弱で、縦 800m 横 500m ほどの口の字の水路を 30 人乗りくらいのボートで巡ります。両岸にはレストランやカフェが並び、木々の緑も美しく、様々な形の橋が並びます。乗船してみて確かに趣があり楽しかったのは事実です。しかし、これが世界的にも有名な観光スポットになるポテンシャルと持っているかと言われると、少し疑問に思いました。水路の水はさすがに臭くはありませんがそれほどきれいでもなく、また、水路も口の字の運河があるだけで、街中に細い水路が張り巡らされているイタリアのベネチアのような、水と生活の一体感があるわけでもありません。

これほどまでに、San Antonio が世界的な観光都市として有名なのかについて、3つほど理由があることが分かりました。1つ目は、San Antonio がアラモの砦をはじめとするテキサスの歴史とアイデンティティの拠点であるということです。アラモの砦はテキサス独立戦争の象徴です。アラモの砦、リバーウォークそれ自体の価値を超えた価値を San Antonio は有しており、観光客をひきつけていると考えられます。また、2つ目の理由は、アメリカ国内にもかかわらずメキシコ文化に触れられるということです。San Antonio という名前からしてスペイン系ですが、San Antonio 市はメキシコ国境から 240km ほどしか離れておらず、ヒスパニック系の人口も多く、また、市内にはマーケットスクエアなどスペイン物産店が立ち並ぶエリアがあり、リバーウォークの両岸のレストランでもメキシコ料理が楽しめるなど、ここに来れば容易に異国の文化に触れられるという魅力があります。そして3つ目の理由は、San Antonio の近郊に多数の空軍基地があるということです。空軍基地に勤務する兵士は若者が多く、休暇に友達同士、あるいは田舎から家族を呼んで市内に遊びに来ているようでした。実際 San Antonio では多くの制服を着た若い空軍の兵士を見ました。そして、基地に勤務する兵士は異動も早く、次々に入れ替わってはまた観光に来ているようでした。このように San Antonio が観光都市として観光客を集めている理由は、施設のハード面のだけでなく、それ以上に観光客をひきつけ、供給するソフト面があるからです。このことは、観光政策にはソフト要因が決定的に重要だということを示唆しています。

3. おわりに

当初の不安も次第に薄れ、スケジュールだけが飛び去るように過ぎていきました。

最初のホストの David と夜遅くまで「Don't mess with Texas」について話し合ったこと、次の訪問地へ出発するときに見た David の涙、Pflugerville のトレイルの緑の美しさ。次の San Antonio の蒸し暑さ、地区大会でのテキサスチームとの再会、佐藤団長のホスト宅から見た景色と日没。Mexia へ向かう道路からの景色、ホストの Tommy の甥の Paul が延々と語る「人口構造から見たテキサスの産業について」の講義、貨物列車の警笛の音、乗馬と実弾射撃。Yoakum のホストのカウボーイ Jarrod とその息子 Jett、NASA からの帰りのレストランでの大本さんのホストの Neil の満足げな顔、牧場で Jarrod と話をして分かったカウボーイの過酷さ、毎朝必ず食べたタコス。朝クロスワードを解き終わるまで出発してくれない Georgetown のホストの Jim、メルヘンチックな寝室、なぜか鉄道ファンの Deborah と一緒に乗った AMTRAK などなど、テキサスでの出来事は忘れ得ません。また、団長団員にも恵まれ、助けてもらいながら、当初想定していた研修目的は達成できたものと考えます。メンバーにお礼申し上げるとともに、お世話になったすべての方々へ感謝したいと思えます。

テキサス GSE 報告書 (品川 明日香)

はじめに

砂漠とカウボーイ...それが私の持っていたテキサスのイメージでした。実際に訪問した4月から5月にかけては季節柄タイミングがよく、ブルーボネットやインディアンブランケットなど、テキサスのシンボルとなっている野草が咲き緑豊かな牧草地が広がっており、それまでのイメージを心地よく裏切られました。



「ブルーボネット」

応募時に観光行政について学びたいと希望したものの、リバーウォークやコンベンションで世界的に有名なサンアントニオは、今回訪問する5870地区にはありませんでした。が、ラッキーなことに、テキサスにある10地区のうち6地区合同の地区大会がサンアントニオで開催されたことから、希望していた観光都市も訪れることができました。



「リバーウォーク」

プログラムについて

プログラムは基本的に現地ロータリアンがボランティアで組んでくださいます。面積が日本の約2倍もあるテキサス州は、その広大なゆえ州内の移動が大変でしたが、実に見事に日程が組まれていました。地区大会も含めると全部で12回、ロータリー例会でプレゼンテーションをする機会に恵まれました。日本がどこにあるのかもよく知らないとおっしゃる多くのロータリアンに、大阪・日本のPRをできたのは、大変幸運だったと思います。

オースティン滞在中にちょうど誕生日を迎え、誕生日パーティを開いてもらいました。初めて会う方から次々とバースデーカードをいただき、バースデーソングでのお祝いや四角いケーキ、お返しに踊った日本舞踊など、すべてが一生心に残る誕生日となりました。



「ろうそく何本？」

職業研修について

観光行政を学びたいと希望していたところ、オースティン市観光コンベンションビューロー、テキサス州観光局、旅行コンサルタントのフェルマタ社、ジョージタウン観光コンベンションビューロー・経済開発局の方々にお話を伺う機会を得ました。

テキサスでは相対的に、石油や農業、ITといった産業がウエイトを大きく占め、観光はさほど期待されている産業ではないという印象を受けました。そもそもアメリカ連邦政府に観光部門はなく、各州がそれぞれに観光局を設置しており(テキサスの場合は知事室直轄)、日本とは行政構造が異なります。観光予算は基本的に宿泊税や消費税を財源にしています。

オースティンやジョージタウンの観光局プロモーションも、旅行需要の圧倒的に多い国内観光客をターゲットとしていて(イベントが中心)、日本のように国をあげて海外からの観光客誘致に取り組む状況とは異なりました。車社会であるため、海外個人旅行者を取り込むのが難しいというのも事情としてあるかもしれません。



「オースティン市観光コンベンションビューロー」

旅行コンサルタントの Fermata 社社長の Eubanks さんは、現状の観光業界が「High volume(多数), High impact(環境負荷大), Low yield(少利益)」となっている構造を「少数旅行者、環境負荷小、多利益」に変えるべきだと主張されています。必要なのは、観光地周辺を丁寧にまわり、観光資源を発掘すること。そして発掘した資源をそれにふさわしい写真と言葉で、旅行者が受け取りやすい形で発することだそうです。同社では旅行者の利便性のためにインターネット、特に iPhone を使ったビジネス展開をしており、個人旅行者の需要取り込みを図っています。実は今回アメリカを訪れて、iPhone や Blackberry といった携帯端末の普及率が大変高いことに驚きました。こうした端末を片手に旅行ウェブサイトをクリックすれば、自分が現在いる場所の周辺地図、さらには付近にある歴史的遺跡、観光サービスなどを即座に検索できるというものです。行政の観点からだけでは見えない新しい視点について教えていただいた思いがしました。



「ジョージタウン観光コンベンションビューロー・経済開発局」

ホームステイについて

今回はオースティン、サンアントニオ、マヘア、ヨアクム、ジョージタウンの5つの家庭で、ホームステイを経験しました。ほとんどのご家族が事前にメール等で連絡を下さっており、最初からとてもフレンドリーな雰囲気でお迎えくださいました。私が滞在したご家庭は、カリフォルニア、日本、ハワイ、ドイツ、イタリアと出身・民族が多様で、それぞれの家庭ごとに「家族の文化」のようなものが感じられました。中には6代にわたってその場所に住んでいるという方もおられました。ホームステイを経験することで、まさに人種の垣根であるアメリカ・テキサスを体験できたと思います。



「Tilrico 家ホストマザーと」

いくつかのホームステイ先ではお子さんがいて、最初は子供特有の早口な英語に戸惑いました。ティーンエイジャーの姉妹がいるご家庭にお邪魔したときは、お父さんが彼女たちに英語のしゃべり方などのマナーを教えている様子が微笑ましかったです。



「Van Sickle 一家」

ホームステイ先のホストマザーや姉妹を相手に、折り紙や花札を教えたり、チキンダンス(?)を教えてもらったり、ボーイフレンドの話や将来の夢について聞くなど楽しかったです。また日本の生活や宗教、武士道、華道・茶道、について聞かれ、アメリカとはまったく異なる日本文化について説明すると目を輝かせて喜ばれました。そしてお子さんたちが手を離れたらぜひ日本に行くからと約束し、将来的な外客誘致のきっかけを作れたかなと自負しています。

おわりに

出発前に多くの先輩方から GSE 研修の素晴らしさを伺いましたが、実際に参加して、本当に日々充実した1ヶ月を過ごすことができたと思います。例会のプレゼンでも、団長を初め皆で阿波踊りを披露するなど、まさに体を張って自分たちの国や文化の紹介し大変好評でした。テキサスで多くのロータリアンと出会いましたが、皆さん口を揃えて「本当に素晴らしいチームだ」と仰っていたのが印象に残っています。適切なアドバイスを下さった諸先輩、快く送り出してくれた職場の人々、大阪・テキサスのロータリアンの皆様、そして佐藤団長(Toshi)と Keiji, Akio, Naomi, Shingo の各メンバーに心から感謝します。



「Mexia の Kirby's Barbeque にて」

テキサス GSE 報告書 (端山 信吾)

はじめに

このたび、大阪西南ロータリークラブの推薦を頂き、アメリカ・テキサスへの研修に参加させて頂きました。アメリカ合衆国には何度か滞在したことがありましたが、テキサスへは行ったことがなく、訪問前のイメージは西部劇そのもので「カウボーイ、サボテン、平坦な荒野」というものでした。

訪れた4月のテキサス中部 (Central Texas) は緑が多く、高速道路脇に様々なワイルドフラワーが咲き、緑に囲まれた自然豊かな、丘の多い「ヒルカントリー」と呼ばれている地域でした。期待通りだったのはカウボーイで、カウボーイではなくても、カウボーイハットを日常的にかぶっている人を多く見かけました。

今までに訪問したことのある他の州とは異なり、至る所でテキサスの州旗を見かけたことやカウボーイのスタイルをしている所から、テキサスの人はテキサスという州やテキサス人であることをとても誇りに思っている、ということを感じることができました。

このテキサスでの4週間の滞在は、毎日色々な人との出会いと別れを経験し、様々な職業についての知識とアメリカの文化を知るとても良い機会になりました。



高速道路脇のワイルドフラワー

職業研修

私は数年間 大阪府ITステーションで障がい者の自立支援を手伝い、現在は大阪府ITステーションの訓練修了生が在宅で仕事をするために立ち上げた組合(SBS有限責任事業組合)でも、指導、助言を行っています。GSEプログラムでは、障がい者自立支援に関する施設の訪問を希望した所、グッドウィル・インダストリーズとテキサス州援助リハビリテーションサービス局の2カ所の施設を訪問することができました。

Goodwill Industries

グッドウィル・インダストリーズは1902年に設立された非営利団体です。(日本の人材派遣会社 株式会社グッドウィルとは無関係の団体) この団体は、不要品を寄付品として回収し、障がい者やホームレスに自ら修理・販売をさせる事で、雇用サービスを提供し、その販売利益を使って職業訓練をすることで経済的自立を実現させている組織です。

この組織は 現在 15ヶ国にありますが、日本にはまだ組織ができていません。

アメリカ国内では地区別で独立している、独立採算制のNPO団体です。例えば オースチン近郊とサンアントニオ周辺では運営している組織が別になっていて、それぞれで独自の営業戦略を立てながら運営しているようです。

職業研修ではオースチン郊外にある、コンピュータ修理工場兼 訓練施設と併設されている販売所を訪問しました。ここでは、企業などから寄付された大量の廃棄パソコンや周辺機器を大きな工場に集め、中古

品として販売するために訓練を受けながら修理していました。ここで修理された機器を売るために併設されている販売店舗では、お客さんが沢山入っていて、盛況ぶりがうかがえました。



中古コンピューター 販売店舗

訓練施設では、一般の会社に就職するための基礎的な知識を教えていましたが、会社の職業に合わせた内容の授業をするだけでなく、障がい者が企業で働くために必要になる機器の調査・分析も行って、テレビ電話システムを利用して自宅に居ながらホテルの窓口で手話通訳をする方法、ウェブサイトが視覚障がい者対応になっているかを視覚障がい者がチェックする作業など、職業の幅を広げるための提案をおこなっていました。ITステーションでも同じような取り組みをしていることを伝えると、案内をしてくれた Sarah と意気投合して、お互いの現状の問題点など色々な話をすることができました。

この施設では、調査用の障がい者用機器などは、最新の物を購入できるわけではなく、ほとんどの機器がテキサス大学からの寄付や企業からの寄付の中古品に頼っているのが実状のようでした。

また、アメリカでも障がい者の社会参加は容易ではないことも分かりました。大企業でない限り、仕事に就くために必要な障がい者用機器などを就職先の会社が購入してくれることはなく、一般的に自費で購入する必要があること、リーマンショック以降の景気後退で健常者の労働者でも職を見つけることができない状況になっている中、障がい者はもっと大変な状況にあり、相当なスキルを身につけていないと就職は難しいことなど、ADA法（アメリカ障害者法）が制定されていても、障がい者が特別に働きやすい環境ではないという現実を聞くことができました。

グッドウィルの店舗は、オースチン近郊、サンアントニオやジョージタウンなど少し大きい町には必ずといって良いほどあり、移動中にもいくつも看板を見かけるほど各地に展開しているようです。日本ではリサイクル事業で大きくなっている企業は沢山ありますが、非営利団体として社会的弱者に職を与えるという事業で、これだけの規模で成功している例を見たことがなかったので、とても驚きました。

成功している要因として、ガレージセールの文化からも分かるように、日本のように使える物を安易に捨てない事、逆に商品に多少難があっても使える物は利用する事がその根底にあると思いますが、もう一つ Good Will に寄付をするとその商品の買い取り総額分の免税を受けることができるという税制優遇策がある事が大きく影響していると思います。

サンアントニオでは、職業研修の予定にはありませんでしたが、予定を変更してグッドウィルの店舗を訪問させて頂く事ができました。店舗ではリサイクルされた服・家電製品・本・食器・コンピュータ関連品など様々な物が安価で売られていました、また店舗の一角に、いわゆる職業安定所のような場所が有ったことには驚きました。家庭や企業からの不要品がこの団体を通してリサイクルされることで、社会奉仕と環境保護を同時にかなえるとても合理的な仕組みだと思えます。



店舗の中に職業安定所が

日本に帰って調べた所、Goodwill Industries International は国際友好産業振興団体(※参考)という名前でロータリークラブの社会奉仕プロジェクト支援団体として Rotary International と協力関係にある組織だということが分かりました。

Goodwill Industries の日本支部はまだできていないので、この組織を日本に作り、ロータリークラブと協力することで、現在 私が行っている障がい者への自立支援活動の幅が広げられるのではないかと考えています。

※参考:国際友好産業振興団体(Goodwill Industries International) について

http://www.rotary.org/RIdocuments/ja_pdf/factsheet_goodwill_ja.pdf

<http://global.goodwill.org/partners/rotary-international/>

Texas Department of Assistive and Rehabilitative Service (テキサス州援助リハビリテーションサービス局)

テキサス州 援助リハビリテーションサービス局にある施設を訪問しました。

(午前:Rehabilitation Technology Resource Center、午後:Criss Cole Rehabilitation Center)

Rehabilitation Technology Resource Center

主に身体不自由者の為の機器相談、展示、研究を行っている場所で、部屋の中には最新の機器がたくさん展示されていました。

障がい者向けの機器だけを置いているのではなく、ガラスを運ぶ吸着盤をお風呂の手すりに利用するなど、一般的に利用されている物で、使い方を少し変えれば障がい者向けに利用できそうなもの等も研究・展示されていました。

これは、障がい者専用機器の価格が高額なため、一般で利用するものを障がい者向けに利用できれば、それだけ安価に対応ができるという観点からです。

30 分程度の滞在でしたが、時折、電話がかかってきて 訪問の日程の調整や購入場所を伝えていました。話を聞くと 各市町村のセラピストが、障がいの状況に応じて機器を提案しているらしく、そこからの問い合わせがよくあるとの事でした。十分に存在が知られていて、きちんと機能を果たしている施設だと実感しました。



最新機器が至る所に展示されている。

Criss Cole Rehabilitation Center

ここは視覚障がい者向けの施設で、機器展示だけでなく、全寮制の訓練施設も一つの建物に集約されています。

機器展示で機器の紹介をしてくれた Joe は全盲の視覚障がい者ですが、いわゆる日本オタクで、小さい頃から日本のテレビゲームをしたりアニメを見ていて、日本に何度も行ったことがあると言っていました。彼が「日本のマンガのキャラクターが目が大きい所からも分かるように、日本は目を見て相手を理解する文化だから、日本では視覚障がい者は敬遠されやすく、就職でも同じでとても難しい。」と言っていたことが印象的でした。彼が日本に行くときは常にサングラスをかけているのですが、これはある程度話をしてからサングラスをとって視覚障がい者だと伝えないと、初めから敬遠されてしまうという理由からでした。日本の社会を海外の視覚障がい者から見た意見を聞いたことは、とても有意義でした。

次に、視覚障がい者の訓練施設も見せてもらう事ができました。訓練施設としては、全米の中でも5本の指に入るほどの規模と設備らしく、この施設にはテキサス州だけでなく、他の州からも訓練に来ています。入学をするのはいつでも大丈夫で、訓練を受けるのは無料、他の州から来ても無料で受けられるそうです。

基本的な訓練は以下のような内容でした。

訓練の内容(通常10ヶ月程度)

- 6ヶ月
ライフスキル訓練
→ 生活するための基本的な訓練、点字等も学習
- 3ヶ月
PC 操作(タイピング、スペリング、PC 操作)
→ 履歴書を書く等の就職活動に必須能力
ファイナンシャルサポート
→ 自活するためのお金の管理
- 6週間
ボランティアワーク
→ (1日3,4時間無償で働き、「できない」という気持ちを無くす)

その後、地元に戻って、地域のカウンセラーに手伝ってもらいながら仕事を探すという流れになっています。

全員が同じスケジュールで訓練を受けるわけではなく、訓練期間や訓練内容も個人毎に内容が異なっていて、早い人では4ヶ月～5ヶ月で全ての訓練を終了することもあるようです。1クラス3人～6人の少人数制で、通常約60人程度の生徒が訓練を受けているとのことでした。視覚障がい者の訓練として、電動ドリルを使って木工細工で椅子や棚を作るなど、日本では考えられないような訓練も行っていました。

また、「できない」という気持ちを無くすために、ボランティアワークを受け入れてもらえるように、様々な企業に対して交渉を続けているそうです。



視覚障がい者の訓練、電動ドリルでコンピュータデスクを作成中

この訪問で感じたことは、社会的弱者に経済的な支援をすることが目的になっているのではなく、スキルを身につける事で自立した生活を送る手助けをすることが目的になっているということです。大阪府ITステーションでも同じ考え方で障がい者の自立支援を行っているので、アメリカでの障がい者の自立が法整備のおかげだけではないことが確認できて非常に心強く感じました。

私も 同じような考えで障がい者の自立支援活動をしているので、GSEプログラムで学んだ事や、このつながりを生かして一人でも多くの障がい者が自分の力で経済的に自立できる様に努力していきたいと思っています。

ホームステイについて

今回、5つの家にホームステイをさせて頂きました。どの家庭も、子供が独立したあとの夫婦での生活を楽しんでいるご家族でした。

共通してとてもありがたかったのは、できるだけ私が快適に過ごせるように常に考えていてくれたことです。「どんな食事が良いのか」「洗濯は大丈夫か」など 気を使ってくれる以外に、できるだけ自由な時間をくれた事は、プレゼンテーションの準備やブログの準備などをする上でとても助かりました。

彼らとは日本に関する事を毎日のように話すことができました。本を見せながらの日本の伝統文化の説明、ホストのビジネスの日本における同業他社の事、政治について、沖縄の基地の事、日本の料理に関して、等 知識が足りない部分はインターネットで調べながら 色々な話ができたことは、お互いの国の事や考え方を知る上で、とても良い経験になりました。

彼らの所にもう一度 訪問したり、彼らに日本に訪問してもらえるように、この先も連絡を取り続けたいと思っています。

おわりに

今回のGSEプログラムでは、佐藤団長 並びに すばらしいメンバー達のおかげで 充実した楽しい4週間を過ごすことができました。このメンバーの一員として参加できたことを誇りに思います。

GSEプログラムで学んだ事を自分の職業に生かすことに加えて、テキサスでの現地ロータリアンとの交流やホストファミリーとのふれあいを今後の人生での人との関わりの中で生かすことが、このプログラムに参加した意味ではないかと感じています。

最後になりますが、一生に一度しか経験できない、素晴らしいプログラムに推薦して下さいました大阪西南ロータリークラブの皆様、GSEプログラムをより良い体験にするために尽力して下さいました 2660 地区・5870 地区のGSE関係者の皆様、忙しい身でありながらオリエンテーションや壮行会に参加して我々に有意義なアドバイスをして下さいました大谷ガバナー、そして全てのロータリアンの方々に感謝いたします。ありがとうございました。



Thank You Texas!!

テキサス GSE 報告書 (大本 尚美)

はじめに

オースティンの空港に着き、まず私たちを迎えてくれたのは、“歓迎”と漢字で書かれたウェルカムボードと現地の GSE 委員や私たちのホスト。予想以上に多くの方の出迎えに驚くのと同時に、いよいよ始まるというワクワク感でいっぱいになりました。今思えば、あの盛大で暖かい出迎えが今回のプログラムのすべてを表していたようにも思います。気さくで明るいテキサン(テキサス人)とハイウェイ沿いに咲き誇るカラフルなワイルドフラワーに癒され、1 日目からすぐに現地の環境になじむことができ、少しばかりの不安もすぐに吹き飛んでしまいました。そしてそれはプログラム終了時まで変わりませんでした。スケジュールはきっちりと管理されており、変更の連絡もスムーズで、研修に同行してくださったロータリアンなどはみな、道中私たちが疲れたりしないように、飲み物や休憩時間などの細かい拝領までしていただきました。そして何よりも皆明るくユーモアがあり、一緒にいるだけで自然とこちらも元気がでるような、そんなすてきな人達でした。



職業訓練について

私の勤務先 ILC 国際語学センターは学校法人滋慶学園グループのメンバーということで、現地の職業研修では、大学、コミュニティカレッジ、専門学校、高校、語学学校など合計 9 校を訪問させて頂きました。

主な訪問先:

- [大学]
University of Texas/Baylor University/South Western University
- [コミュニティカレッジ]
Austin Community College (ACC)/Navarro College/
McLennan Community College (MCC)
- [専門学校]
Texas State Technical College

大学とコミュニティカレッジの住み分け

テキサスでは大学生の 7 人に 1 人がコミュニティカレッジからの編入生であるというデータがあるほど、コミュニティカレッジにとって大学への編入コースは大きな柱です。中でも新しい取り組みをしていたのが、McLennan Community College (MCC) です。同じ圏内に州立大学が存在しないため、編入するには学生達は住み慣れた地元を離れなくてはなりません。そのような問題を解決するため、6 つの州立大学と提携し、大学から講師を派遣してもらうことにより、学生は MCC にいながら大学の学位を取得することができるというプログラムです。日本では大学と短大・専門学校などまだまだこのような関係を結んでいるところは少ないように思います。学校の都合ではなく、学生のニーズを第一に考えたすばらしい取り組みだと感じました。



地域産業との結びつき(WIN-WIN の関係)

今回訪問したコミュニティカレッジや専門学校の多くは地域産業と非常に良い関係を保っていると感じました。元々アメリカのコミュニティカレッジは大学と違って教育レベルの低い人にもオープンで費用も良心的なところが多いのですが、それだけではなく、特に職業訓練コースでは学生たちを地元産業に還元できるコース設計を重視しています。地元企業はカレッジに設備投資(研修施設、機材、講師)や資金投資することで、より実践的な人材を育成してもらえるため、雇用の際に有利になります。またカレッジにとっては資金面での協力だけでなく、その企業の名前を売りに就職に有利なコースとして学生たちにPR することができます。学生たちは研修施設の整った環境で学ぶことができ、就職後の実践に活かすことができます。Austin Community College では、卒業生の 95%が地元で活躍しているそうです。また Texas State Technical College では、予算の 75%を企業からの資金で賄っています。また Navarro Community College では、学生ホールなど一部施設が地域の市民会館のような役割も果たしており、住民の生活の一部としてコミュニティカレッジが存在しているという印象を受けました。



Dual Credit (二重単位) と学生募集

訪問した学校の多くが Dual Credit の制度を採用していました。これは高校生が在学中に大学レベルのコースを修了することで高校と大学／コミュニティカレッジの両方の単位を取得できるようにするシステムです。大学やコミュニティカレッジへの進学率アップに有効な制度です。また、学生募集のツールの一つとして、PSAT(大学進学適性検査)をうまく利用したものがあります。これは PSAT の成績優秀者のリストを大学やカレッジが有料で入手し、Eメールやフェイスブックなどを使って個人個人にアプローチするというものです。生徒はこれにより何百というアプローチを大学やコミュニティカレッジからもらうのです。学校側は返信のあった学生にオープンキャンパスや奨学金などの詳細を送ります。企業のヘッドハンティングのようなイメージですが、学校側もよりダイレクトなアプローチに変化してきているのだと感じました。



留学生の受け入れ状況

University of Texas や Baylor University 以外はまだまだ未開拓な部分が多いと感じました。理由の一つとしては、やはり地元密着型の学校が多いことがあげられると思います。

ただ、McLennan Community College と South Western University は今後留学生募集を強化していきたいということでしたので、今後私の職種を活かして何らかの形で協力できればと思っています。また特に Austin 地域ではマンガやアニメーションなどのニーズが増えているという声もありました。この分野は日本の強い部分でもありますので、こちらもコンテンツ提供などで協力できるかもしれません。今回訪問した各校とは今後も交流を続け、お互いにとって良い刺激を与え合うことができればと思います。大変内容の濃い研修でした。



ホームステイについて

今回私は5つの家族にお世話になりましたが、ほとんどがGSEのメンバーを泊めるのは初めてという家族でした。パストガバナー(Ronney & Mary)とyoakumのコーディネータ(Neil & Beth)は何年かGSEに関わり、素晴らしいプログラムだからぜひ今度はホストをしてみたいということで、今回買って出たそうです。中でもパストガバナーのRonney & MaryはAustinでのホストでしたが、San Antonio, Yoakum, Georgetownでの例会やイベントにもわざわざ駆け付けてくれました。おそらく各地域のロータリアンとの交流を兼ねているのだと思いますが、「みんながちゃんと頑張っているかチェックしに来ているんだよ！」と来るたびに皆に声をかけて明るく接してくれました。普段は公認会計士の仕事があり朝7時前には家を出て夜も遅く忙しい彼ですが、この時だけは私たちのためにと時間を作ってくれていました。改めて温かい心遣いに感動しました。



ホストとの時間

私がステイした家族は比較的外食や外出好きなどが多く、一番の会話の時間は車の中でした。朝晩の送り迎えでも片道 30 分は当たり前でしたし、Mexico のホストは朝食はいつもマクドナルドのドライブスルー。公園のそばに車を止めて、ゆっくり食べるのが日課でした。テキサスは公共交通機関がほとんどない車社会です。銀行のドライブスルーや朝晩の交通渋滞、対人より動物との事故が多い話など、移動中の時間も、テキサス人の日常を知る大切な時間でした。皆でワイワイ会話する時間とはまた別に、ホストの運転する車の助手席で、家族や生活のことなどをゆっくり話す時間が私のお気に入りでした。普段とは違う一面が見えることもあり、ホストとの関係を深めることができた貴重な時間でした。



おわりに

まずは、出発前からオリエンテーションや準備などでお世話になった大谷ガバナーをはじめ、2660 地区の皆さまやアルムニ会の皆さまには、貴重な機会を与えてくださったことに改めて感謝いたします。プログラム中、毎日新しい人との出会いがありました。1ヶ月という限られた期間とはいえ、このように日々新しい人との交流がある毎日はとても刺激的でした。そして出会った人が皆あたたかく接してくれたことにも感動しました。GSE プログラムとかかわることを心から楽しみ、ロータリアンとして奉仕活動をしていることを誇りに感じている、ということがひしひしと伝わってきました。あるホストは、滞在中のお礼を伝えると、「僕たちも心から楽しんだよ」といい、「奉仕することによって、僕たち自身も得るものがあるんだ。時には得るもののほうが大きいときもある。」と笑顔で返してくれました。心の底から真剣に取り組んでくれたからこそ、言える言葉だと感じました。日々の生活の中でサービス精神や奉仕活動は大切であることは頭ではわかっている、本当の意味を理解していたのか、自問しました。GSE プログラムを通じて出会った人達のあたたかいホスピタリティを、今度は私が与えていく番だと思っています。このような一人の小さな気づきが、世界各地の GSE プログラムやそのほかの活動によってたくさん芽生えることで、世界平和という大きくて不可能にも思える目標を達成することにつながると実感しました。少なくとも今は私が体験したことを一人でも多くの人に伝え、価値観を共有することがこのプログラムに参加した私たちの使命だと思っています。最後に、常に明るく私たちをまとめてくださった佐藤団長と、チームワーク抜群の明るく楽しいメンバーにめぐり逢わせて頂いたことに感謝します。ありがとうございました。

